



ママズ・リーズン

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

Contents

- 1 最初の誤解
- 2 添い寝のひみつ
- 3 少女の心
- 4 母娘の肖像
- 5 スカートの風
- 6 子どもたちの反乱
- 7 星空の誘惑
- 8 涙の告白
- 9 母の事情

★タップすれば各章へジャンプします

1
最初の誤解

以前の浜路雅樹を知る者なら——同じゼミの学生とか高校時代の友人、それに九州の実家の母でさえ——、まちがっても彼のことをおしやれだなどとは言わない

だろう。

たとえば一年前の六月、澤入邸を初めて訪れた時の雅樹の格好はと言えは：：長い間履いていなかったの
で表面にかびが浮いた革靴、あわてて寝押ししたせい
で何本も折り目がついているズボン、流行遅れの襟の
大きなブレザー、つくりの小さな顔からはみ出してし
まっている黒ぶち眼鏡、意図的に伸ばしているわけで
なく何カ月か床屋をさぼった結果の長髪：：もちろん

それはコーディネートなどという以前の問題で：：要するに、今どきめずらしいほど身なりに無頓着な学生だったのだ。

大学があるのは名古屋でも山の手の、ファツシヨナブルな街、八事^{やごごと}。ふだん、そのあたりをぶらぶらしているても、場違いな感じはまぬがれないのだから、そこからさらに十五分ほど入ったリツチな住宅地、音聞山^{おとききやま}をきよろきよろしながら歩いていけば、もうじゆうぶ

ん「不審な存在」ですらある。

現に、大邸宅が並ぶ人通り少ないその道ですれ違った奥様ふうの女性は、露骨にうさん臭げな視線を向けてきた。もしかすると、企業幹部宅をねらう爆弾犯人か、幼児誘拐をたくらむ異常者とも思ったのかもしれない。

もつとも、自分より背が低く、かつ眼鏡のせいで三枚目ふうに見える雅樹の顔に、すぐ疑いを解いたよう

ではあったが。

古村教授から聞いた住所を頼りに、雅樹は澤入邸を探した。

名古屋に来てすでに三年あまり。土地カンがないわけではない。しかし、大学近くとは言え、ふだんこんな場所に来ることはまずないのだ。その上、一区画全体が一軒の屋敷だったりするわけで、各家の門を見つけて表札を確かめるだけでやたら時間を食ってしま

う。

だから、緩い勾配を登りきり澤入邸を見つけた時には、約束の時刻に十分も遅れていた。

「澤入」と表札がはめ込まれた門柱にインターホンはあったが、門扉が大きく開いたままだったので、雅樹はそのまま邸内に入った。

敷石の道を挟んで両側の庭は芝生が敷きつめられ、高い塀のすぐ内側や、その他ところどころに、よく手

入れされた立木が植えられている。

門から十五メートルほど奥に、洋風の造りの屋敷があり、その手前にはバラの咲く花壇があった。花壇の横には子供用の白いブランコが置かれ、さらにその向こうに、ちよつとした砂場までつくられている。

二階建てらしい屋敷は、このあたりでは飛び抜けて大きいというわけでもないのだらうが、それでも、たぶん部屋数は十を下らないだらう。

屋敷の脇には同じ外装のガレージがあり、シャツタ
ーが上がっていたので、そこにベンツとジャガーが停
まっているのが見えた。

さほど車に興味があるわけではないが、その二台の
よく磨かれたボディに見とれ、雅樹は玄関の数メートル
手前で思わず立ち止まった。

と、その時、ズボンの後ろを何か引つ張った。あ
わてて振り向くと、目の前には誰もいない。

「……ん？」

視線を下ろすと、黄色いワンピースを着て熊のぬいぐるみを抱いた女の子が立っていた。身長は一メートルに満たない。おそらくは三歳前後だろうか。

「……だあれ？」

女の子が言った。

「あ、お父さん、いるかな？」

雅樹が聞くと、女の子の方がまた聞いてきた。

「おきやくしやん？」

どうやら、まず自分の質問に答えてほしいということとらしい。サ行がまだうまく発音できないというのに、ずいぶんおしやまな感じがする子だ。

「うん」

雅樹がうなずくと、女の子はやっと納得したらしく、「こつち」と先に立ち、玄関の重そうな木製ドアを体全体を使って開けた。

「ましやしゃーん。おきやくしやん」

玄関に入ると、女の子は大声で奥に向かって叫んだ。すると、ちよつとの間をおいて、六十年輩の女性がエプロンをたたみながら出てきた。

「……はい？　どちら様でしょう？」

「あの……N大学の古村教授からのご紹介でうかがったんですが……」

「あ、……はい、……？」

たぶんお手伝いさんなのだろう。その女性は、ちよつと不可解そうな顔をしながらもうなずいた。そして、女の子に視線を移して言った。

「舞ちゃん、えらかったわね。お客様、ご案内してくれたのね。昌さん、もうじきおかたづけ終わりますか
らね。それまでお庭で遊んでてね」

「はい」

飛び出して行く女の子の後ろ姿を微笑して見ていた

雅樹に、「昌さん」は、「どうぞお上がりください」と言った。

応接間に通されたあと、雅樹は、十分ほど待たされた。

部屋は高級な内装と調度で揃えられていたが、ごてごてした感じはしない。

（高そうだけど、成金趣味じゃないな）

そういうことにはまったく疎い雅樹にも、それはよくわかった。先刻の吹き抜けになった玄関ホールや廊下などにしてもそうだった。

出されたコーヒーが冷めかかった頃、ドアがせかせかとノックされた。

「……あ、は……」

雅樹の返事を待たずドアが開き、四十歳前後らしい長身の男が飛び込んできた。たぶん主人の澤入裕一朗

だろう。

「いや、待たせちゃったね」

と、そう言ったところで、澤入は雅樹の顔を見て、あんぐりと口を開けた。

「……あれ？」

「あ、なにか……？」

あいさつしようとしてソファを立った雅樹が聞き返すと、澤入はまだ怪訝な表情のまま、ドアを閉め、雅樹

の向かいに座りながら言った。

「女の子じゃ……ないんだ」

澤入がさっさと腰掛けてしまったので、名乗るタイミングを失った雅樹も、またソファに腰を下ろした。

「古村先生も相変わらず早とちりだな。電話では女の子の名前言ったぜ」

「あの……」

雅樹が言いかけるのも聞かずに、澤入は、カジュアル

だがやはり高級そうなジャケットのポケットからメモを取り出し、つづけた。

「ほら、『浜島サキ』って」

「え？ ……あつ。 ……あの、僕、浜路雅樹、ですが
……」

雅樹はあわてて、ショルダーバッグから用意してきた履歴書を取り出した。

「え……？」

受け取った澤入は、それを開き、見ると、いきなり吹き出した。

「あっちゃー。早とちりは俺かあ」

言葉づかいは乱暴だが、育ちのよさそうな印象もあっていやな感じはしない。それが、かえって飾らない率直さに見えるのだ。

澤入はそのあと、笑いながら雅樹に言った。

「おい、古村先生には、このこと、黙っててくれよな。」

あやうく恩師をアルツハイマーにしちまうところだった」

「はい。前にも僕、こういうことありましたから。名前の音だけ聞くと、間違えられたりするんですよ」

先刻のお手伝いさんの不可解そうな顔も、主人から「女の子が来る」と聞かされていたせいだと気づき、雅樹も笑いながら言った。

「そうだろ。勘違いする名前だよ。……しかし、それ

にしても、こりや困ったよなあ……」

ようやく笑いがおさまると、履歴書に目を通しながら澤入が言った。

「……あの、女性じゃないとだめってことですか？」

「うん……古村先生に頼んだ時から、そのつもりだったしな。N大は女の子多いしさ……。いや、たぶん、そう思ってたのは俺だけで、また俺の言葉が足りなかったんだらうけどな。『住み込みできる家庭教師を紹

介してください』くらいのことしか言わなかった気がするから」

澤入はそう言って履歴書をたたむと、ちよつと表情を変え、事情を話した。

「じつはさ、一年ほど前に病気で女房を亡くしてね。三十五だからまだ若かったんだ。俺もショックでさ。一時は事業にも手がつかないほど落ち込んだ」

「はあ……」

澤入ができるだけ深刻にならないようにさっぱり話は返す言葉がなかった。

「で、最近やっと立ち直ってさ。放ったらかしといた会社の方をテコ入れしなきゃと思ってるわけだ。だけど、子どものことがな……。小学校五年の女の子を頭に、あと、男、女、女と四人もいるんだ。いちばん下なんか、まだ三つでさ」

「あ、さつき庭で会いました」

雅樹が言うのと、「うん」と相づちを打ち、澤入はつづけた。

「母親亡くしたわけだから、やつら、俺以上にシヨツク受けたと思うんだ。だからこの一年間はなるべく家にいるようにしてたんだけどな。会社のこと考えると、もうそうも言ってもらえなくてさ。しかし、まともにやろうと思うと、長期出張なんてことも多いんだ」

澤入はそこでため息をついた。

「お手伝いの昌さんはよく面倒見てくれるんだが、家事だけでも大変だろ。彼女ももう年だしな。俺の運転手やってる旦那といっしょにここに住み込んで、休みもなしでやってくれてるんだ。せめて夜くらいは解放してやりたいじゃないか。で、子どもの面倒見てもらうためにもうひとりお手伝いを雇おうかと思ったわけだ。でも、女房が生きてるうちから、家のことはすべ

て昌さんが仕切ってきたわけだから、そういうの、なんか、プライド高い彼女を傷つけそうでき……」

言葉づかいの粗っぱさのわりに、澤入はまわりにきめ細かい気づかいをする性格らしい。話を聞きながら、雅樹はそう感じた。

「で、家庭教師ってことならいいんじゃないかと思っただ。まともに単位取ってる四年生だったら、卒論があるくらいで時間的余裕もあるだろ。給料ちゃんと

出して住居費もいらなくなったら、責任もってやってくれる子もいるんじゃないか、ってな。それで、古村先生に相談したってわけ」

「：：ええ。だいたいのお話は、古村教授からお聞きしてます」

「しかしなあ、男かあ：：。もともとお手伝いって発想だったし、家庭教師なんて言ったって、はっきり言っちゃまえば子守ってことだしな：：。俺としては、当

然、女の子をイメージしてたから……」

「はあ……」

雅樹が困った顔で相づちを打つと、澤入はいきなり話の方向を変えた。

「……君、子ども、好きなのか？」

「あ、はい、昔から。じつは大学入ってからもずっと、ボランティアで地域の子供サークルの指導なんかやってたんです。古村教授もそのへんのご存じなんで、

紹介して下さいったんだと思います」

「……ふうん」

澤入はちよっと考え込んだ。

雅樹はそこで、もう一方の事情を言うべきかどうか迷ったが、率直にしゃべってくる澤入には正直に言うっておいた方がいいような気がしてつづけた。

「それに、じつはちよっと困ったこともあって……」

「……ん？」

「僕、今、鏡ヶ池のそばに下宿してるんですよ。古くて狭くて汚い下宿屋だけど、部屋代安いんで一年の時からずっと。ところがあそこ、都市高速の建設が始まったでしょ」

「ああ、それに引っかかって取り壊しつてわけだ」
「そうなんです。で、立ち退かなきゃいけなくなつて。ところが、どれだけ探しても今ほど安いところなんてないし……」

「なるほどな。今どき珍しいボランティア志向の苦学生としては、ほとほと困ったってわけだ」

思ったとおり、澤入はそのことをへんに雅樹の「下心」などととらず、素直に同情してくれたようだ。

「で、立ち退き期限はいつなんだ？」

「今月いっぱいなんです」

「そりやまた急な話だな。でも、こっちの条件とはぴつたり合う」

「ええ、そうなんです」

「まあ、こっちも急な話だからな。来月頭からってのは、要するに、来月、長期出張があつてさ。ヨーロッパと中国まわって来るんだ。パリとミラノは次シーズンの買い付けだけだからどうってこともないんだが、中国の方は、自社ブランドの縫製工場探して契約するわけだからな。へたすりゃ、両方で一ヶ月以上かかる」

「ああ、アパレル関係なんですか」

「うん。婦人衣料の商社。経済紙ふうによえば、地場の優良中堅企業ってとこだ。……まあ、そんなことはどっちだっていいが……」

そのあと澤入は腕組みし、独り言のようにつぶやいた。

「……しかしだ。へたに若い娘なんか入れて、まわりから誤解されちゃかなわんしな。それに、男の方が、子どもたちに母親のことを思い出させることもないだ

ろうし……」

「どうやら、思っていることがそのまま口に出てしま
うたちらしい。」

「……留守中の用心のことを考えても、その方がいい
ことはたしかだ……」

そして、やっと雅樹の顔を見て聞いてきた。

「君、学校の方はどうなんだ？」

「あ、はい。卒論以外は、あと週ふたコマ出れば卒業

できます」

「ほう、真面目なんだ。：：よし、そんならこうしよう。どうやら見る限りにおいては、君は悪いやつじゃなさそうだ。古村先生の推薦もある。とりあえず俺が出張に行く夏の間だけ、試用期間ということで見てもらおう。それ以降のことは、子どもたちの意見も聞いて決める。そういうことでどうだ？」

「はい」

雅樹が返事をするると、澤入はさっそく給料やその他の条件を示した。

給料の額は、雅樹が想像していたよりずっと多かった。大卒初任給の倍ほどもある。雅樹が驚いた顔をすると、澤入は「ほぼ二十四時間拘束ってわけだしな。それに、俺としても責任もってやってもらいたいから」と言った。

そのあと澤入は、なんとその場から引っ越し業者に

電話を入れ、転居の手はずまで整えてしまった。その決断と行動の速さは、さすがやり手の若社長という感じがした。

「それにしても……」

すべての話がまとまると、澤入は雅樹の全身をあらためて見て言った。

「君、その格好、もう少しなんとかならんのか」

雅樹が澤入邸に引っ越したのは、六月の最終土曜だった。

三年三ヶ月住んだとはいえ、学生の身で、その上、狭い下宿だ。引っ越し荷物は小型トラック一台分にもならなかった。運ぶ距離も三キロと離れていないわけだから、午前中の早い時間には荷物の運び込みも終わっていた。

澤入邸で雅樹があてがわれたのは、ちょうど広い階

段の下にあたる八畳ほどの洋間だった。備え付けのベッドの分を除いても、机や本棚などを入れたあと、まだ前の部屋より数倍広いスペースが残った。クローゼットもあったので、古いファンシーケースやカラーボックスを処分してしまったせいもある。

部屋を片づけている最中、この前会った「舞ちゃん」と、学校から帰ったばかりらしい男の子がのぞきに来た。

舞は雅樹の片づけを手伝ってくれようとしたが、はつきり言ってじやまにしかならなかつた。

男の子の方は、名前を聞くと「俊介」と名乗り、すぐ「サッカーできる？」と聞いてきた。雅樹が「うまかないけど、俊介には負けないな」と言うと、「僕、ジュニアFCに入ってたぞ」といばってみせた。

十二時をまわり、雅樹が段ボール箱などをかたづけしていると、お手伝いの「昌さん」が「お昼の用意がで

きましたよ」と呼びに来た。

昼食の席には、土曜日で、昼までに学校や幼稚園を終えた子どもたち全員がそろっていた。

「これからお前たちの遊び相手になってくれる浜路雅樹先生だ。わがまま言って迷惑かけたりすんなよ」

澤入は、雅樹と子どもたちのそれぞれを正式に紹介した。

「これが長女の春花。小学校五年だ」

雅樹が「よろしく」と言うと、春花はそれには答えず、澤入に言った。

「私、パパが最初言ってたように、お姉さんの方がよかった」

「春花、それはこの前ちゃんと説明しただろ。浜路先生は子どもと遊ぶベテランなんだぞ」

長女の抗議に澤入はちよつとあわて、たしなめる口

調で言った。

「そうだぞ、そういうこと言っちゃいけないんだぞ」

春花の隣に座った俊介が、父親の尻馬に乗って口を出した。

春花は、弟をにらみつけたあと、ぷいと横を向いてしまった。

澤入は、雅樹に向かって肩をすくめてみせ、俊介を紹介した。

「長男の俊介、三年生。やんちゃ坊主に見えるが、じつは内弁慶の泣き虫だ」

姉に意見をしていい気になっていた俊介は、父の言葉にちよつとふくれた。

「次女の美里。幼稚園の年長さんだ」

「こんにちは」

美里はきちんとあいさつしたが、その声は小さかった。四人の中ではいちばん目立たない存在のようだった。

「末の舞、三歳だ。まだ、夜ときどき失敗する」

「あーっ、舞ちゃん、もうおねちよちないよ」

父の紹介にプライドを傷つけられたらしく、舞は抗議した。

「これはこれは、失礼いたしました」

澤入は舞にオーバーにあやまってみせ、それから雅樹の横に座った老夫婦に目を移した。

「運転手の斉藤欣次さんとお手伝いの昌代さん。もう

十年になるかな？」

「先代がお元気でした時からですから、早いもので十三年たちました」

昌代が答えた。やせて気弱そうな夫の欣次は、ただ無言でうなずいただけだった。昌代はさらに雅樹の方に向き、こうつけ加えた。

「やさしそうな方なんで安心しましたよ。よろしくお願ひしますね」

「いえ、こちらこそ」

そのあと、出身地とか子どもの頃の話とか、おもに雅樹についてのあれこれの話題で昼食はつづいた。

子どもたちでその会話に参加してきたのは、俊介と舞だけだった——もつとも舞の場合は、かみ合った「会話」になっていたわけではないが。

美里はみんなの話をにこにここと聞きながらも、だま
って食事していた。

春花はそんな会話には興味がないとばかり、さっさと食べ、「ごちそうさま」と途中で席を立ってしまっ
た。

春花がダイニングを出ていくと、澤入はため息まじりに雅樹に言った。

「あいつもそろそろ、むずかしい年頃ってことかな：
：」

父の言葉を耳ざとく聞きつけた舞が、「むじゆかち

い、とちごろ？」と聞き返した。

その土曜の午後と翌日の日曜日、雅樹はほとんどの時間を子どもたちと遊ぶことに費やした。

母親を亡くしたばかりということもあり多少心配していたのだが、澤入家の子どもたちはおおむね素直で明るく、雅樹がこれまで子どももサークルで接してきた子どもたちと比べても、扱いやすい部類と言ってよか

った。

ただし、それは、俊介と美里、それに舞についてはということだ。

春花は、その二日間、食事の時間を除いてほとんど雅樹の前に姿を見せなかった。土曜の午後と日曜の午前中は自分の部屋——春花と俊介はすでに個室を持っている——に閉じこもっていたし、日曜の午後は「友だちの家に行く」と言って出ていってしまった。

春花のことは気になったが、他の子どもたちが自分になつけば、いずれ向こうから近づいてくるにちがいないと考え、雅樹は俊介たちと遊ぶことに専念した。もつともそれは、春花のことに関わっている余裕がなかったからでもあった。

いくら素直な子たちだといえ、八歳の男の子と五歳と三歳の女の子を同時に遊ばせるのは、けっこう大変なのだ。それぞれの興味がまるでちがうからだ。

俊介はサッカーボールなどを持ち出し体を使う遊びをやりたがり、美里は折り紙とかお絵かきに興味を示す。舞は当然、ままごとのようなごっこ遊びをやりたがる、というわけである。

雅樹は、これまで子供サークルのボランテニアで覚えたゲームなど、三人ともがのってきそうな遊びの知識を総動員しつき合った。けつきよく、三人がそれなりに楽しめるのは「かくれんぼ」系のゲームのようだ

った。

週が明け、春花、俊介は小学校に行き、美里は幼稚園に行つて、夕方近くまでは舞とだけ遊べばよくなつた。そこで、雅樹はやつと一息つけた。

舞とならさほど暴れまわらなくてもいいし、彼女はまだ「お昼寝」が日課になっていたから、昼食後二時間ほどは休憩もとれた。

しかし、三時半になって美里の幼稚園バスが近所に着く頃から、上の子たちもあいついで帰宅する。そのあと、彼らが寝る夜の九時くらいまでは、また目がまわるほど忙しかった。

俊介以下の三人の子どもたちは、雅樹のことが気に入ったらしく、始終まとわりついてくる。夕食まで彼らとめいっぱい遊び、夕食が終わると「私も手伝うから」と言う昌代を自室に返し、雅樹は小さい二人を風

呂に入れ、寝かせつけ、そのあと俊介の宿題を見てやったりもした。

舞も含め、三人はよくしつけられていて、着替えなど身のまわりのことはだいたい自分でできたから、どうしようもなく手が掛かるといふわけではないのだが、それでも、その一週間で雅樹はぐったりと疲れた。

それに、長女の春花は相変わらず雅樹を無視しつつづけていたから、そのことも気になった。

次の日曜の朝、雅樹は澤入の書齋に呼ばれた。

「この一週間、君には感心したよ。君はほんとに真面目だし、それにだいいち、子どもたちがあれほどなつくとは思ってなかった。まあ、春花のことはあるが、君を見てれば、それも時間の問題だという気がする。試用期間なんて言わず、君の都合がつく間はずっと勤めてもらっていいと思ってる」

雅樹はどうやら合格したようだ。

「どうか、俺がいない間もよろしく頼むよ」

その日曜から、澤入は例の海外出張に出ることになっていたので。

「もう二週間もたつと、上の子たちも夏休みに入る。

君も今以上に大変になると思うが、まあ、昌さんもいることだし、今の調子でやってくれ。俺は、子どもはのびのび育てたいと思ってるから、まだ勉強とかは気

にしなくていい。とにかく、やつらがさみしくないよ
うに、めいっぱい遊んでやってくれ」

「はい」

雅樹が返事をする、澤入はうなずき、こうつづけ
た。

「この家の中にあるものは、なんでも好きに使って
いい。ここにある本なんかも自由に見てもらっていいよ。
ただ、ここと、この隣の部屋には子どもたちは入れな

いでほしい。やつらにあんまり荒らされたくないんだ」
ふだん子どもたちにかびしい規制などしない澤入に
しては、めずらしいことを言うと思っただが、たしかに、
この部屋の立派な蔵書をめちやくちやにされてはたま
らないだろう。

雅樹はそう考え「はい」と返事した。

昼過ぎになって、一人の女性が澤入を迎えに来た。

いかにもキャリアウーマンというきびきびした感じと、華やかさをあわせもった美人だった。

「秘書の山村美奈子君だ」

雅樹が彼女の顔をぽかんと見ていたからだろう。家族全員が見送りに出た玄関で、澤入は笑いながら紹介した。

雅樹がちよっと緊張して「よろしく」と言うと、美奈子は「こちらこそ」と、魅力的な微笑みを返した。

「おみやげ買ってきてね」

「早く帰ってきてくださーい」

俊介や舞の言葉に、澤入は「いい子にしてるんだぞ」と言っつて、美奈子とともに欣次が運転するベンツに乗り込んだ。空港に向かうのだ。

車が出ていく時、ふだん雅樹の前ではほとんど口をきかない春花が、ぶすつとした口調で言った。

「また、あの人といっしょよなんだ」

春花は、雅樹ばかりでなく、美奈子のことも好きではないようだった。

「ねえ、かくれんぼちよーよ」

覚えたばかりのかくれんぼが、舞はよほど気に入ったらしい。

澤入が出発した翌月曜日、舞はまた、雅樹にかくれんぼをねだってきた。

梅雨でもあり、その日も雨だったから、室内で遊んでいたのだが、舞は絵本やレゴに飽きてしまったようだ。

「だめだよ、雨だから」

「おうちの中でやればいい」

たしかに、広い澤入邸には隠れる所はいくらでもある。

「うーん」

雅樹がちよつと考え込んでみると、舞はさっさと立ち上がったと言った。

「シヤキシヤんがオニね」

あわててリビングを飛び出していく舞を見送り、しかたなしに雅樹はソファに顔を伏せて数え始めた。

舞が言った「シヤキシヤん」というのは雅樹のことである。

最初、澤入は子どもたちに雅樹のことを「浜路先生」

と呼ばせようとした。しかし、「先生」というのはな
んだかくすぐったくて、雅樹が辞退した。それで、子
どもたちには「雅樹さん」と呼ばせることになった。

ところが、まだ口のまわらない舞は、昌代に対する
「ましやさん」という呼び名と混乱してしまった。

そして、彼女なりの解決策として「ま」をとって「シ
ヤキシヤン」と呼ぶようになったのだ。最近では、俊
介や美里もそれに影響され「サキさん」と呼んでいた。

けつきよく雅樹は、最初の日には澤入がまちがえたのと同じ名で、子どもたちから呼ばれることになったのだ。

2 添い寝のひみつ

だいたいにおいて、人間、若い頃というのは子どもが好きでないものだ。自分がまだ多分にわがままで自分勝手だから、子どものそんなところが、逆にうつと

うしいのかも知れない。特に男にその傾向が強いように思う。

ところが、浜路雅樹の場合、この年齢の男にはちよつと珍しいほどの子ども好きなのである。子どもと過ごしている時が、他のなにをやっているより楽しいと感じられるのだ。

なにもそれは今に始まったことではなく、幼い頃からそうだった。九州で過ごした小中学校時代から、自

分より小さな子たちを集めて遊ぶことが多かった。べつにガキ大将だったわけではない。ただ、小さい子たちの面倒を見るのが好きだったのだ。

おそらくそれは、雅樹が母ひとり子ひとりという家庭環境で育ったせいだろう。さみしがり屋で、ずっと弟や妹がほしくて仕方がなかった。

だから、小さい子どもたちに優しく接した。遊んでやり方もうまく、近所の母親たちからも「マー君と遊

んでれば安心ね」などと言われた。

高校時代、子供会の世話役のようなことを買って出たのも、名古屋の大学に入って、自分から区の児童館を訪ね、子どもサークルのボランティアをしていたのも、けっきょくはその延長だったと言っていていい。

そういう意味では、澤入家の住み込み家庭教師というアルバイトは、雅樹にはまさに打ってつけだった。

小学校五年、三年、幼稚園児、そして三歳の四人の子

どもたちを一日中めんどろ見るといふ、ふつうの若い男ならすぐに逃げ出してしまふような仕事も、楽しくやれたのだ。

だから、澤入が海外へ発った翌日、澤入家の末娘、三歳の舞にせがまれ、かくれんぼをしていた時も、雅樹はそれを自分自身けっこう楽しんでいた。

「舞ちゃん、こつち来ませんでした？」

ほぼ一階を探し終わった雅樹は、キッチンに入り、

そこでかたづけものをしていたお手伝いの昌代に聞いた。

「さあ、見なかったけれど……？」

「おかしいな、二階じゃないはずだし」

雅樹は首をかしげた。

二階に上る階段は、オニの雅樹が目をつぶって数えていたリビングにある。その間、階段を昇る気配はなかった。外は雨降りだし、舞はまちがいなく一階のど

ここにいるはずだった。

「もしかすると……」

雅樹は心配になって書斎に急いだ。

書斎は、澤入から子どもたちを入れるなど言われている場所だ。雅樹は広い澤入邸の廊下を奥まで行き、あわてて書斎のドアを開けた。

しかし、天井までの書棚が囲むその部屋に人の気配はない。唯一隠れられる場所である大きなデスクの下

ものぞいてみたが、そこにも舞はいなかった。

「……とすると……」

雅樹は廊下に出て、書斎のひとつ手前のドアのノブに手をかけた。

ここも、澤入が子どもたちを入れるなど言っていた部屋だ。そして、ここは、雅樹自身もまだ入ったことのない部屋だった。

雅樹はそこを、澤入のプライベートな居室かなにか

だろうと考えていたのだが、入ってみると様子はちよつとちがった。

書斎と同様、フローリングされた六畳ほどの室内には、カウチとテーブル、それに大きな鏡がふたつ置かれていた。ひとつは姿見、そしてもうひとつは化粧台のようだ。

そんなことに詳しくはない雅樹も、化粧台の上などがあまりにも整然としすぎている気がした。長い間、

人が使った気配がないのだ。

雅樹は首をかしげながら室内を見渡したが、やはりここにも舞の姿はない。それで、雅樹が部屋を出ていこうとした時だ。

部屋の一面に造りつけられたクローゼットの中で「かたっ」と音がした。

「……ん？」

振り返った雅樹が、そのクローゼットに近づいてい

くと、案の定、中から息をつめる気配が伝わってきた。クローゼットの折りたたみ式の開き戸は、ブラインド状になっている。だから、おそらく中にいる舞からは雅樹の姿が垣間見えているのだろう。

「おやあ、なんだかかわいい子の匂いがするぞ」

雅樹は、オニらしくちよつと恐ろしげな声で言いながら、クローゼットの開き戸に手をかけた。

「……んふ」

中から、その緊張がこらえきれないという感じで、舞のかすかな笑い声が聞こえた。

雅樹が取っ手に力を込めて勢いよく開き戸を開けると、舞は「きゃ」と叫んで、そこに吊るされたたくさんのドレスの後ろに隠れようとした。

と、そのせいでドレスが引っ張られ、ハンガーが奥の棚に引っかかったのだ。

何枚かの服がハンガーからはずれ、舞の上に落ちた。

さらに、棚の上ののせてあった箱の類がその上に落下した。

「あつ、あぶない」

雅樹は思わず叫んでいた。

がたがたと大きな音がし、いくつかの箱が服の下でもがく舞にあたり、まわりの床に散らばった。

落ちたひょうしにふたが開いたそれらの中味は、ほとんどが女性用の帽子だった。どうやら重いものでは

なさそうだ。舞がそんなに痛い思いをしたわけではないだろう。

「舞ちゃん、だいじよぶ？」

雅樹が声をかけると、舞が服の下から顔を出した。

「ふーっ」

やはりびっくりしたらしく、舞は肩を大きく上下してため息をついたが、泣いてはいなかった。

それで雅樹も一安心し、散乱した服や箱を見まわし

て、ため息をつきながら言った。

「あーあ、こんなにしちやって」

舞はちよつと照れくさそうに雅樹を見上げると、おしやまな感じで肩をすくめ、「これ、ママのよ」と言
った。

その時、廊下を走るスリッパの音が聞こえ、昌代が
部屋にかけ込んできた。

「どうしたんですか？」

箱が落ちる音と、雅樹の声を聞きつけたのだらう。

「あ、すみません」

澤入からこの部屋に子どもを入れるなど言われていたこともあり、雅樹は昌代に謝った。

「シヤキしゃんのしえいじゃないよ。舞ちゃんが引つ張ったから、落ちてきちやったの」

舞は、幼いながら、雅樹のことをかばわなければいけないと思っただらう。

「あら、まあ……」

クローゼットの中の舞の顔を見てやはり安心したの
だろう。昌代は笑いながら言った。

「舞ちゃん、ここは入っちゃダメって、パパから言わ
れてるでしょ」

部屋に入った昌代はそう言いながら、さっそく散ら
かったドレスや帽子の箱をかたづけにかかった。

雅樹もちよっと責任を感じ、舞にリビングで遊んで

いるように言い、それを手伝った。

舞が出ていくのを見送ってから、雅樹は昌代に聞いた。

「ここ、死んだ奥さんの部屋だったんですね」

「ええ、奥様が着替えやお化粧品に使ってらしたの。ほんとはもう整理してしまってもいいのに、旦那様はそれができないでいらっしやるのよ。そのくせ、舞ちゃんたちには立入禁止にしてらっしやるの」

「母親のことを思い出させたくない……？」

「そう。剛毅そうに振る舞ってらっしやるけれど、旦那様という方は、繊細でお優しい方だから」

海外に発つまでの十日ほどしかつき合いはなかったが、澤入にそんなところがあるのは雅樹にもよくわかった。

そう思いながら床に散らばった帽子と箱をかたづけ
ていた時だ。雅樹は、夏用のつば広帽子の下に隠れて

いたあるものをなにげなく拾い上げ、思わず手をとめた。

「……ん？」

手の中に冷たいぐにやりとした感触があった。それは、ちょうど掌の上いっぱいにのるくらいのも、肌色のゲル状のかたまりだった。

「あ、それは……」

振り向いた昌代が、あわてて雅樹の手からそれを取

り上げた。

昌代は床からそれが入っていたらしい箱を探して、急いでしまい、ふたをした。

その物の不気味な感触にも、そして、昌代のちよつと狼狽したような様子にも驚いた雅樹は、つい昌代の手もとを注視した。箱の中には、ガーゼかなにかにくるまれて、同じような物があと一つ入っていたようだ。

昌代がその箱を背伸びしながら棚にしまう間、雅樹

はぽかんとしていた。

振り返りその顔を見た昌代も、説明しなければいけないと思ったのだろう。戸惑いの表情を浮かべながらも、雅樹に向かって言った。

「奥様のご病気、ガンだったの。最初は、舞ちゃんを生んで半年後くらいに乳ガンが進行していることがわかって……。まだ授乳期だったんだけど、思い切って片方のおっぱいを切除してしまわれたの。放射線治療

じゃもうどうにもならないと言われてね。まだお若かったし、おつらかったと思うわ」

昌代は、まるで自らのことのように悲しそうな顔をした。

「でもけつきよく、ガンがリンパに入ってたらしくて、あちこちに転移してね。それから二年ももたなかったんですけどね。今のは、胸をとったあと、奥様が使ったてらしたパッドなの」

雅樹は伏し目がちに小さくうなずいた。こんな話は聞いている方も辛い。

でも一方で、その説明に妙な納得もいった。

掌に感じたあの感触は、まぎれもなく「乳房」だったのだ。

そんな小さな事件があっただけで、雅樹の澤入家での生活はおおむね順調に過ぎていった。

長女の春花だけは相変わらず雅樹になつこうとしなかつたが、他の三人の子どもは、家にいる間ずっと雅樹と遊びたがり、また一方で、言うこともよくきいてくれた。

病気などする者もいず、四人とも元気に過ごせていたのもありがたかつた。

澤入が長期出張に出た日から十日あまりが過ぎ、上の三人の子どもたちの学校や幼稚園が夏休みに入つ

た。

雅樹は、文字どおり朝から晩まで子どもたちの面倒を見なければならなくなったが、そのころには澤入家の家風——と言っても、もともと堅苦しい家風などある家でもないが——や子どもたちの個性にも慣れ、生活のペースができあがっていった。

そんな平穏な日々がつづいた七月下旬の深夜。ある

大事件が起こった。

「浜路さん、浜路さん」

ベッドで寝ていた雅樹は、ノックの音とともに切迫した感じの昌代の声で目を覚ました。

「どうかしたんですか？」

ドアを開けると、昌代が青い顔をして立っていた。

「うちの人の様子がおかしいんです」

澤入の運転手をしている昌代の夫、欣次が倒れたと

いうのだ。

澤入が海外出張に出ているため、その間、欣次は休みをとって家——つまり、澤入家の中のこの夫婦にあってがわれた部屋——で過ごしていた。欣次は高齢でもあり、澤入が気を使ってそう取り計らったのだ。

しかし、律儀な性格の欣次は、申し訳ないと言って、毎日せつせと邸内の手入れなどをしていった。その日も、一日中、炎天下でガレージの外壁の補修をしていたよ

うだ。

たぶん、それがたたったのだろう。夜、寢床に入つたあと、欣次は急に苦しみだしたのだという。

昌代たちの部屋に行き、脂汗を流し胸を押さえて苦しがる欣次を見た雅樹は、すぐに一一九番した。

救急車が来て、昌代は、欣次につきそって乗り込んだ。

翌朝早く、昌代はいったん澤入邸に戻った。しかしそれは、欣次と自分のぶんの着替えなどをとりに来たのだった。

欣次は心筋梗塞で、その日の午前中に手術をするこ
とになったという。

昌代は、雅樹にしきりにわびながら「結果次第だけ
れど、もしかしたら長くなるかもしれない」と言った。

そのあと雅樹は、澤入が逗留している上海のホテル

に国際電話を入れ、ことの経緯を報告した。

「会社に連絡して、すぐ代わりのお手伝いを手配させる」という澤入に、雅樹は、昌代に答えたのと同じ言葉を繰り返した。

「料理くらいは何とかできますから、僕だけで大丈夫ですよ。昌さんみたいにきちんとやる自信はないけど、たぶん子どもたちもいろいろ手伝ってくれると思いますから」

父親が留守の今、これ以上知らない人間を入れて、子どもたち——特に幼い舞と美里——に余分な不安を与えたくなかった。それに、春花を含め、子どもたちとさらに親密な関係を持ついい機会だと考えたのだ。

「すまん。俺の方も契約がもうひとつうまく運ばなくて、あと少なくとも半月くらいはかかりそうなんだ。大変だと思うがよろしく頼む」

澤入は、本当にすまなそうな声でそう言った。

雅樹は子どもたちにも事情を説明した。

「：：ふうん、じゃあ、サキさんがご飯つくったり、お洗濯したりするの？」

「ああ、だから、春花と俊介が美里や舞ちゃんの間を倒を見てやるんだぞ」

雅樹の言葉に、子どもたちはとりあえずは納得したようだった。春花は、相変わらず雅樹に対して不機嫌そうな顔を見せていたが、それでも、その話のあと、

ずっと美里と舞につき合って遊んでやっていたところをみると、むやみに反抗しようと思っっているわけでもないようだった。

幼いうちに母を亡くし、昌代もよくしつけていたから、おおむね聞き分けがよく、自立した子どもたちなのだ。

その日の午後、病院の昌代から、バイク郵便で封書が届いた。中を開けると、日常生活に必要なお金のあ

りかから生ゴミや分別ゴミを出す曜日、買い物をするスーパーや出前などをしてくれるお店、そして、子どもたち一人一人についての生活上の注意事項まで、こと細かく書かれたメモが入っていた。

字がひどく乱れているところを見ると、おそらく欣次の手術を待っている間に書いたのだろうが、几帳面な昌代らしく、その内容は便箋十枚以上にもわたっていた。

こうして、澤入家での雅樹と子どもたちだけの生活は始まった。

じつは雅樹も、幼い頃両親が離婚し、片親で育った。福岡市内に茶道と着つけを教える教室を持っている母は、けっこう忙しくて不在がちだったので、雅樹は小学校の頃から家事をやらされていた。

だから、料理や洗濯など、どうしていいのかわから

なくて困るということはない。

しかし、広い澤入邸のこと。日常子どもたちが出入りする部分の掃除をするだけでも、たっぷり一時間はかかってしまう。その上、子どもたちと遊んだり、危ないことのないように目を光らせたりしていなければならぬのだ。

夕食の片づけをし、子どもたちを風呂に入れ寝かしつける頃には、一日目にしてぐったりと疲れていた。

前夜、欣次の一件であまり寝ていないせいもあつたかもしれない。

(明日からはもう少し合理的にやらなきやな)

そう思いながらベッドに入ると、すぐに睡魔が襲ってきた。

しかし、この晩も雅樹は、人の声で起こされることになつた。

目を覚ますと、廊下からしくしくと悲しそうに泣く声
が聞こえた。

雅樹があわててベッドを出てドアを開けると、薄暗い廊下に、タオルケットを引きずって泣いている舞の姿があつた。

雅樹の顔を見ると、舞はしゃくりあげた。

「ましやしゃんが、いないの」

雅樹は、昌代が送ってきたメモの中にあつた一文を

思い出した。

「……。舞ちゃんは、ときどき夜中に目を覚まし泣く時があります。たぶん、奥様が亡くなった時のことを思い出すのでしょう。そんな時は（旦那様には内緒ですが）私が、自分の部屋で添い寝をしてあげていました。この頃は少なくなっただけけれど、気をつけて見ていてあげてください。……」

昌代が家にいないという不安から、舞は恐い夢でも

見て目覚めた。ところが、そのこと自体を忘れ、いつものように昌代の部屋に行ったのだろう。そこには当然、誰もいなかった。それで、いよいよ不安になった。たぶん、そうにちがいはなかった。

雅樹が「おいで」と手をさしのべると、舞はしやくり上げながらその手に抱かれてきた。

ところが、雅樹のベッドに寝かせ、添い寝してやつても、舞はなかなか泣きやまない。しくしくとしやく

りあげつづけるのだ。

「……ましやしゃんが、いないの」

「だいじょうぶだよ。サキさんがいつしよにいてあげるから」

何度言っても、舞は悲しそうに泣きつづけ、寝つこうとしない。

そんな状態が三十分以上もつづき、雅樹はほとほと困っていた。

「早く寝ないと、明日、元気に遊べないよ」

「ましやしゃんが、いないの」

舞はそう繰り返しながら、雅樹の胸に顔を埋め、泣いていた。

ふと気がつくとき、舞の手が雅樹の体をなでるように動いていた。

そういえば、さつきからずっとそうしていたようだ。

(……え?)

「ましやしゃんも……、ママも……、いないの」

舞は、雅樹の胸をまさぐりつづけているのだった。

そこにあるはずの「何か」をさがして。

舞が求めているのは、なにより「母親」なのだ。幼い舞にとって、「母親」の体に抱かれることが、不安から逃れられる唯一の方法なのだろう。たぶん昌代も、舞と添い寝する時には乳房を触らせていたにちがいない。

雅樹は本当に困ってしまった。

もちろん、三歳の子がまったく寝ないでいられるわけはない。このまま泣かせておけば、いつかは泣き疲れ、寝入ってしまうだろう。

でも、それではあまりにかわいそうな気がした。この子は、去年、母を亡くし、そして今、その代わりになってくれていた昌代を失うことに恐れおののいてい
るのだ。

自分も、父と母が別れた時、三歳だったはずだ。よく覚えていないが、その時はやはり、こんな悲しい思いをしたのだらう。でも、少なくとも自分には、母がずっとそばにいてくれた……。

雅樹は、泣きつづける舞の顔を見ているうちに、自らもせつないような気持ちになっていた。

そして、あることを思い出した。

「舞ちゃん、ちよつとだけ。ちよつとだけ待ってね。

すぐ戻ってくるから」

雅樹は、舞にそう言い残してベッドを出た。

それは、すぐに見つかった。

ふたを開けると、箱の中にはガーゼに包まれたシリコンラバー製の美しいパッドが二つ入っていた。舞たちの母親が切除したのは、片方の乳房だけだったはずだから、一つはおそらくスペアなのだろう。

あの時は気づかなかつたが、よく見ると乳首までついていた。

それを手に取り、雅樹はしかし、躊躇ちゆうちよした。

舞の泣き顔を見ていた先刻はいい考えだと思ったが、こうして一人になると、とんでもなく馬鹿なことをしようとしているように思える。

だいいち、そのパッドを胸に当ててみても、それだけでは固定できない。当然、何かで押さえなければな

らない。たぶん、ブラジャーかなにかに入れるのだから、それがどこにあるのかわからなかったし、それになにより、そんなものをつけた自分の姿を想像するだにおぞましい。

そんなことをするなんて、亡くなった舞たちの母を冒流ぼうとくすることになる気もする。

ちよつとの間、雅樹はそれを持ったままためらって
いた。

しかし、雅樹がこうしている間も舞は泣いているだろう。長い時間、舞を一人にしておくわけにはいかない。とにかく、やってみるだけの意味はあるかもしれない。

雅樹はそう思い、クローゼットの中に造りつけられているチェストを開け始めた。

下着の入った引き出しはすぐに見つかった。雅樹はそこから、レースなどのついていない、シンプルなデ

ザインのブラジジャーを探し出した。

Tシャツタイプのパジャマの上を脱ぎ、そのブラジジャーのストラップに腕を通す。

もちろん、そんなことは雅樹にとって初めての経験だった。

背中に腕をまわし、おぼつかない手つきでホックをとめようとするが、なかなかうまくはまらない。肩胛骨のあたりが痛くなるほど背中をそらし、やっとの思

いでそれをとめた。

次はカップの中に例のパッドを入れる。片方だけでもこと足りると思ったが、それではやはりおかしい気がして、箱からもうひとつ取り出し、両方のカップに入れた。

二つのパッドはその中にピッタリと納まり、雅樹の胸にひんやりとした感触が貼り付いた。

ホックをとめる時、知らず知らずに体をまわしてい

たのだろう。その時、雅樹はクローゼットとは反対の方向を向いていた。だから、目を上げると真正面に姿見があった。

「……え!？」

鏡の中には、一人の女が立っていた。

パジャマのズボンをはき、裸の上半身にブラジャーだけをした女。伸ばしっぱなしの長髪が、細いストラップの食い込む肩のあたりで揺れている。

眼鏡を外しているの、顔の表情までははつきりわからなかったが——いや、だからこそかもしれないが——、それは、女として少しもおかしくない自然な姿に見えた。

日頃から、自分の体つきを華奢だとは思っていたが、ただブラジャーを着けたというだけで、こんなにも女っぽくなってしまふことに雅樹は驚いた。

一瞬、もっと鏡に近づいて見てみようかと思った。

だが、舞のことを思い出し、急いでその上からパジャマをかぶり部屋を出た。

ドアを閉めようとした時、両胸が大きく揺れ、そのことに、雅樹はなぜかどぎまぎした。

舞はベッドの中でまだ泣いていた。

雅樹までがいなくなつて、よけいに心細かったのだろう。タオルケットをすっぽりとかぶり、その中で体

を丸めて肩を震わせているのだ。

「ごめんね」

雅樹はそうやって、舞の隣に体を滑り込ませた。

舞はすぐに雅樹に抱きついてきた。やはり、さびしかったのか、さっきまでの悲しそうな泣き方とちがいで泣きじやくるといふ感じで雅樹の胸に顔をこすりつけてきた。

そして、次の瞬間、しやくりあげながらも、きよと

んとした顔をして雅樹を見上げた。

雅樹は、舞の目を見つめ、ゆっくりとうなずいてみせた。

舞はおずおずと手を伸ばし、Tシャツの上から雅樹の左の胸に触れた。そして次には、両胸の間に顔を埋めた。

雅樹はその頭を抱き、髪の毛をやさしくなでてやった。

舞の小さな手は、雅樹の左の「乳房」をまさぐり、乳首のすぐ下あたりに止まると、そこをもむようにした。

「……ママ」

舞がつぶやいた。

あとでそういうことにもっと詳しくなってから思い返してみると、この時、雅樹がしていたのは、薄く柔らかな素材のシームレスブラだった。意図してではな

いにしてても、ある意味で、雅樹は最適なものを選んで
いたことになる。

小さなぷっくりとした手が、自分の胸の柔らかかなも
りあがりをもんでいた。

最初はくすぐったいような思いでその手を見つめて
いた雅樹だったが、そのうちに、しだいに奇妙な感覚
にとらわれていった。

それはパッドなのだから、もちろん直接接触られてい

る感触はない。しかし、シリコンラバーの弾力を通して舞の手の動きは微妙に素肌に伝わってくる。けなげさと切実さのこもったその動きに気持ちを集中していると、まるで自分の本物の乳房をもまれているような錯覚がした。

そして、そう感じると、心理的にも不思議な感情がわいてきた。

その手がそこをもむごとに、舞へのいとおしさがつ

のつていく気がした。泣きやんだ舞の顔に、穏やかなあどけなさが戻っていくごとに、自分自身も心が満たされていくように感じた。

やがて、いつしかその動きがゆっくりになり、舞は、雅樹の「胸の谷間」で静かな寝息を立て始めた。

舞の頬をつたう涙を指先でそつと拭ってやりながら、雅樹は、自分の心が、ゆったりと満ち足りているのを感じていた。

3 少女の心

人間には、やたら人の目ばかりが気になるタイプと、そんなことはまるで気にしないタイプがいる。

身なりにまったく無頓着なことからもわかるよう

に、浜路雅樹は、あきらかに後者の方だろう。人の目を気にして、びくつくようなところはみじんもない。

それはもしかしたら、離婚家庭で育ったことで世間の目にさらされ、逆に身についてしまった一種の自己防衛反応なのかもしれないが、一方で、人がよく明るい性格の雅樹に対して悪意を抱く人間など、まずいないからでもあった。

ところが、泣きじやくる舞に奇妙な添い寝をした日

の翌日、雅樹は一日中、澤入家の子どもたちの目になってしかたがなかった。

いくら舞を寝つかせるためとはいえ、ブラジャーとシリコンパッドをつけて、それをまさぐらせるなんて、朝になって考えてみれば自分でもおぞましいと思うのだから、他の子たちが知ったらなんと言うだろう。

幼い舞本人は、昨夜の出来事をそんなに奇妙だとは思ってないようだったが、他の子たちはそれなりに物

事の判断がつく年齢なのだ。

特にもう小学校の上級学年で、その上、雅樹に反感を抱いているらしい春花が知ったら……。春花はそろそろ思春期が始まる年頃でもある。どう考えても、変態じみたそんな行為を許すはずはない。

例のパッドと下着は、舞が寝ついたあと、もとのところに戻しておいたし、子どもたちは朝まで熟睡していたようだったから、昨夜の出来事を知っているのは

舞だけだ。

しかし、その舞が——奇妙だと思っ
ていないだけに——、他の子
たちにべらべらしやべらないともか
ぎらない。

それで、今日一日、雅樹は家事をこ
なしながらも気が気ではなかつたとい
うわけだ。

たとえば、夕飯の時——

「おいしい。サキさん、女の人みたい
に料理が上手だ

ね」

きのこハンバーグを口いっぱい頬張った俊介は、もちろん感心してそう言ったのだが、その表現に雅樹はビクリとして、舞の方を見た。

しかし、舞はその言葉に反応することなく、やはりおいしそうにハンバーグを食べていた。

雅樹がそっと胸をなで下ろすと、今度は美里がのんびりした口調で聞いてきた。

「サキさん、お料理、誰かに教えてもらったの？」

「……そうだな、やっぱり、お母さんかな？」

雅樹が言うと、そこで舞が顔を上げ、口をはさんだ。

「シヤキしゃんの……ママ？」

雅樹はその言葉にもまた緊張し、舞の思いがよけいな方向に向かないように、あわてて話をつづけた。

「うん。じつはサキさん、子供の頃、お母さんと二人暮らしだったんだ」

「お父さん、いなかっただの？」

雅樹は俊介の質問に「うん」とだけ答えた。両親の離婚の話など、子どもたちにする必要もないだろう。

「でも、サキさんのお母さんは働いてたから、サキさん、子供の頃から自分でご飯つくったりしてたんだ。どっちかって言うと、それで、ひとりでに覚えちゃったって感じかな」

「シャキしゃん、ひとりぼっちだったの？」

舞の思いは、うまく違う方向に向いてくれたようだ。

「うん」

「しやみしくなかった？」

「そりゃ、さみしかったさ。サキさん、君たちがうらやましいよ。兄弟が四人もいるんだもんね」

話の持っていていき方がうまかったのだらう。子どもたちは——相変わらず雅樹を無視しつつづけている春花をのぞいて——、嬉しそうな顔をした。

雅樹はそつとため息をついた。

どうやら舞は、ゆうべのことをすっかり忘れているようだ。ゆうべはいったん寝てから、恐い夢を見て雅樹の部屋にやってきたのだ。その間のことは、夢の一部とでも思っているにちがいない。

夕食が終わり、子どもたちを風呂に入れて寝かしつけたところで、雅樹は、今日一日の自分の心配が無用のことだったと思い、ひとまずは安心した。

ところがそれは、やはり大きな間違いだったのだ。

その夜遅く、舞はまた雅樹の部屋にやってきた。

しかも今夜は、一人ではなく、同じ部屋で寝ていた美里まで連れて。

「ほら、やっぱり女の子じゃないよ」

ノックの音にドアを開けると、そこに舞と並んで立っていた美里がいきなり言った。

「ど、どうしたんだい？」

美里の言葉にじゅうぶん動揺しながらも、二人を部屋に入れ雅樹は聞いた。

「あのね、舞ちゃんが、サキさん、夜になると女の子に変身するって言うの」

ふだんはおっとりしている美里が、ちよつと気色ばんだ口調で言った。

おそらく舞は、子ども部屋のベッドで、昨夜のこと

を思い出したのだろう。それで、美里に話した。当然、美里は「そんなことあるはずない」と反論したはずだ。そのあと、二人は寝ずに言い争っていたにちがいない。で、つれだって確かめに来たというわけだ。

「だって、しょうなんだもん。ママみたいに、おっぱいあつたんだもん」

舞は、むきになって言った。

すでに美里から「舞ちゃんのウソツキ」とか、さん

ざん言われてきたのだ。

雅樹は困ってしまった。

それを肯定すれば、美里に昨夜のことを知られる。否定すれば、舞をウソツキにしてしまうことになる。

雅樹は、二人の幼い少女たちの前で、しばらく立ちつくしていた。

雅樹がなにも言わないので、美里は勝ち誇ったような顔で舞を見た。そのとたん、舞は、案の定ベそをか

いた。

「ウシヨじや……ないもん」

「……わ、わかった。ここで待ってて。今、変身してくるから」

今にも泣き出しそうな舞の顔を見て、雅樹は思わず口走っていた。

「ほらね、やっぱりおっぱいあったでしょ」

「うん」

十分後、雅樹は、二人の幼女に挟まれてベッドに横たわっていた。二つの小さな手に、パジャマの胸のもりあがりをもまれながら……。

あのあと、雅樹は「よわったな」と思いながらも、昨夜と同じように、死んだ舞たちの母の部屋に行き、パジャマの下にブラジャーとパッドを着けて部屋に戻った。

と、舞がすかさず飛びついてきて、雅樹の胸に触れた。

「美里お姉ちゃんも、しやわって」

舞の言葉に、五歳の美里はおずおずと近づき、それに触れ、最初驚いた顔をした。そしてそのあと、多分に疑わしそうな顔つきで雅樹を見上げ、雅樹と目が合うと、今度はなぜか照れたような恥ずかしそうな顔をした。

と、ちやっかり雅樹にしがみついていた舞が「舞ちゃん、きょうもここで寝ていい？」と聞いてきた。

「……えっ？」

雅樹が返事に戸惑っていると、今度は美里が小さな声で言ったのだ。

「……わたしも……」

そして、けっきょく雅樹は、そのあどけない、しかし切実な四つの眼差しに負け、二人を自分のベッドに

寝かせることになってしまったというわけだ。

舞は昨夜と同じように雅樹の右側に寝て、右の「乳房」を小さな掌で揉みつづけていた。

雅樹の左側に寝た美里は、腕枕する雅樹の肩のあたりに頬をすりつけ、やはり左の「乳房」に手をかけて、なでるようにしていた。その美里の手つきは、舞にもまして切実な思いが込められているように、雅樹には思えた。

美里はふだん目立たないおとなしい子だ。おっとり
とにこにこ笑っているその様子は落ちついて見えるの
で、つい大きい子たちと同様に思ってしまうが、考え
てみれば、就学前のまだ五歳の幼児なのだ。本来なら
甘えたいさかりだろう。

しかも、舞よりも鮮明に去年死んだ母の記憶を持っ
ているはずだ。

にもかかわらず、一方で「お姉ちゃんなんだ」とい

う自覚もあるから、舞のように、お手伝いの昌さんに甘えることができずにいたにちがいない。

母親が死んだ後、いちばんさみしい思いをしてきたのは、もしかすると美里なのかもしれない。

もちろん、五歳の美里は三歳の舞とちがって、雅樹の「変身の仕掛け」をそれなりに気づいているのだろう。先刻、いったんは見せた疑わしそうな顔つきが、その証拠だ。しかしそのあと、それを言い立てたりせ

ず、恥ずかしげに自分もいつしよに寝ると言い出したのは、久しぶりに触った「おっぱい」の感触で、長い間こらえてきたそんな思いがあふれだしたのだ。

雅樹は、「乳房」を揉みつづけながらうとうとし始めた幼い姉妹を見つめ、その幼いなりのけなげさに、自分自身なんだかせつない気分になっていた。

(こんなことくらいで、二人の心の傷が癒されるのなら……)

やがて二人は、雅樹のパジャマの両胸のふくらみに小さな唇を寄せるようにして、静かな寝息を立てはじめた。

雅樹はそのあともしばらく、ふたつのかわいい寝顔を見守りつづけた。

もちろん雅樹自身が明確な言葉として意識していたわけではないが、その時の雅樹の心情を最も近い言葉で表現するとすれば、こんなふうになったはずだ。

(∴∴安心していいのよ。二人のことは、ママがかならず守ってあげるからね∴∴)

雅樹とて二十一歳の大学生。自身のそんな行為に対し「大の男がなんて馬鹿なことをしてるんだ」という常識も持ち合わせていたし、一方で、「舞と美里があまりにも哀れな気がして」という言い訳も用意していた。

しかし、おそらくそれだけですべてを説明しきれるものでもないだろう。

前夜、舞に「乳房」をもませることで雅樹自身の中に芽生えた「ある情動」が、そうさせていたという面が少なからずあるのだ。

でなかったら、その夜から毎晩、同じことを繰り返すことには、けっしてならなかったはずだ。

けっきよく美里と舞は、その夜から連夜、雅樹の部

屋にやってくるようになってしまった。そしてそのた
びに雅樹は「しようがないな」などと言いながら、パ
ジャマの下に例のパッドとブラジャーを着け、二人を
寝かせつけた。

じつのところそれは、雅樹自身が自分の胸に甘えな
がら寝つく二人の満ち足りた顔が見たかったから……
いや、もつと端的に言えば、そうされることによって、
自分自身がなぜか満ち足りていくように思えたからだ

ったのだ。

しかし一方で、やはり雅樹は、その行為を他の二人の子どもたちには知られたくないと思った。

だから、美里と舞には、「お姉ちゃんやお兄ちゃんに甘えんぼだと思われたくないだろ。このことはないしよにしとこうね」と言い含めた。

そして二人が寝つくつと、パッドとブラジャーをしま
い、翌朝はなに食わぬ顔で子どもたちに接した。

幸い、雅樹の言葉が功を奏したのか、二人が春花と俊介に夜の話を話している様子はなかった。

ところがそのことでは、雅樹自身がとんだ失敗をしてしまったのだ。

舞たちが雅樹の部屋で寝るようになって五日目のことだ。

じつは、その日から三日間、俊介の通うジュニアF

Cで夏休みの合宿練習があることになっていた。小三の俊介にとっては、初めてのひとりでの外泊である。

ユニフォームとか着替えとか、合宿に必要な物は前日のうちに用意しておいたから問題ないのだが、それとは別に、合宿先の高原へ向かうバスの中で食べるお弁当を持たせなければいけないということだった。それで雅樹は、早朝から起き出し、それを作ったのだ。

その上、張り切った俊介が、行く前に練習しておく

たいなどと言ひ出した。雅樹はそれにもつき合い、午前中ずっと庭でボールを蹴っていた。

昼近くに、近所まで迎えに来たスポーツクラブのバスに俊介を乗せ、急いでとって返し、他の子どもたちの昼食を作った。

それから、午前中にできなかつた洗濯をし、ときどき子どもたちと遊びながら、広い屋敷の掃除やかたづけものをこなした。夕飯を準備し、食後に小さい子た

ちを風呂に入れた頃には、いつも以上に疲れていた。

なにより、朝の弁当づくりとサッカーが効いたのだらう。

そのせいで、夜、例の格好で美里と舞を寝かせつけながら、雅樹自身もつい眠ってしまったのだ。

どのくらい寝ていたのだらう。雅樹は、人の気配を感じ目を覚ました。

最初、雅樹は、美里か舞がむずかったのだと思った。しかし、雅樹の両腕に抱かれて眠る二人は、安心しきったようにおだやかな寝息を立てていた。

(：：ん？)

それで、雅樹が目を上げると、なんとベッドサイドに人が立っていた。

春花だった。

春花は、驚いた顔で雅樹に抱かれた二人の妹たちを

見ていた。

「……春花」

雅樹の声で春花は我に返ったように雅樹の顔を見、
そしてすぐ、あわてて部屋を飛び出した。

「あ、待って」

どうしようか迷ったが、二人を起こさないように気
をつけながら急いでベッドを出ると、雅樹はあとを追
った。

「春花、ちよつと待って」

廊下から呼び止めた雅樹に、すでに階段の途中まで昇っていた春花は足を止めた。

しかし、春花はそのまま硬直したように雅樹に背を向けていた。その後ろ姿は、雅樹の顔など見たくないと言っているようだった。

真夏の夜である。雅樹たちは上半身はなにもかけずに寝ていた。おまけに、舞と美里の手は寝ついた時と

同じ位置に置かれていたのだ。部屋にはスモールランプが点いていたし、春花が雅樹の胸のふくらみを目撃したのは明らかだった。先刻の春花の驚いた表情が、如実にそれを物語っていた。

(ちやんと説明しなければ……)

雅樹はそう思った。

でも、なにをちやんと説明するのか。

呼び止めはしたものの、その言葉が見つからず、雅

樹は立ちつくしていた。

と、雅樹より先に春花が背を向けたまま言った。

「トイレに起きたら、美里たちの部屋のドアが開いて、中に誰もいなかったから……」

それで心配になった春花は、家の中を探したのだ。

そして雅樹の部屋で二人を見つけ、同時に思わぬものを見た。

「……その、つまり……舞ちゃんたちがなかなか寝つ

けなくて、それで……」

雅樹が言いかけると、それをさえぎるように春花が聞いた。

「それ、ママの？」

「……えっ」

「胸」

「あ……、ああ。……だから、つまり、その……」

雅樹は、小学生相手にしどろもどろになっている自

分が情けなかった。

「……ずるい」

春花が言った。

「……えっ？」

その言葉の意味がわからず、雅樹が見上げていると、春花は急にくるりと振り返った。

春花は自分のことをなじるにちがいない。そう思い、雅樹は緊張した。

と、春花は階段を下りはじめた。そして、そのまま雅樹の横を通り過ぎ、すたすたと廊下の奥に向かつて歩いて行ってしまったのだ。

階段も廊下も暗かったので、その表情はよくわからない。

「……？」

振り返って見ていると、春花は、廊下の奥から二つ目のドア、つまり母の衣装部屋だった部屋に入った。

今、雅樹のパジャマの胸を形よく持ち上げているパッドとブラジャーがしまつてあつた、まさにその部屋だ。

開けたままのドアから、部屋の明かりが点くのが見えた。どうしたものか迷つたが、おそらくは「こつちに来い」という意味だと思い、雅樹はあとにつづいた。

中に入ると、春花は部屋の真ん中あたりに立って、なにも言わずクローゼットを見つめている。

死んだ母の形見でもあり、また、母を死に追いやつ

た忌まわしい病気の象徴でもあるそのパッドと下着を、すぐに元に戻せ、と、そういうことだろう。

春花の無言を、雅樹はそう解釈した。それで、そのクローゼットに近づきかけた。

と、それより一瞬早く、春花がそのクローゼットに歩み寄ったのだ。

春花はクローゼットの扉を開けると、そこに吊るされたたくさんの衣服をいじりはじめた。

雅樹はしかたなく、また春花のすることを眺めていた。

と、春花はその中から一着のローズピンクのワンピースをハンガーごと取り出し、雅樹の方に振り返った。

「これを、着て」

春花が言った。

「……えっ？」

またその言葉の意味がわからず、雅樹が聞き返すと、

春花は二三歩雅樹に近づき、そのワンピースを差し出した。

「私がいちばん好きだった、ママの服」

「え？ どういう……こと？」

「いいから、着てみて」

春花は怒ったような言い方でそう言い、強引に雅樹にその服を持たせると、またくるりと後ろを向いてしまった。

そのワンピースを持ったまま、雅樹は困惑した。

「その……、つまりこれは……、僕に対する、仕返し
のつもり？」

あまりいい言い方ではないと思ったが、それしか思
いつかず雅樹は聞いた。

「そんなんじゃない。……お願い……だから」

春花の口調は、今度は怒っているふうではなく、言
葉どおり哀願しているような、さらに言えば、なにか

しきりに恥じているような声音で響いた。

雅樹はしばらく迷っていたが、やがて、いったんその服を化粧台の上に置き、パジャマを脱ぎはじめた。

春花の様子に、なにかただならぬものを感じたからだ。

パジャマを脱ぐと、そこには、ブラジャーにブリーフというおかしな姿の自分がいた。雅樹はここでもちよつと迷ったが、今度はすぐにそのワンピースを頭からかぶった。もし今、春花が急に振り返ったら、もつ

と恥ずかしい思いをする気がしたのだ。

ブラジャーのふくらみに引っかかった裾を引きおろすと、スカートの部分がすんと下に落ち、ウエストも含めて、その服は雅樹の体にすんなりフィットした。よくはわからなかったが、寸法も合っているようだ。

しかし雅樹には、背中のファスナーがなかなか上げられない。両腕を上と下から背中にまわし苦勞していいると、その気配に気づいたのだらう。春花が振り向き、

雅樹の後ろにまわってファスナーを上げてくれた。

「ありがとう」

振り返り、春花にそう言ってから、雅樹は自分がとんでもなくとんちんかんなことを言っている気がした。

春花は、雅樹のことを真正面から見ていた。その視線がいったん足まで降り、そしてまたゆっくりと上昇して雅樹の顔に止まった。

見つめてくるその視線が恥ずかしくて、雅樹は目をそらした。

と、春花の後ろにある姿見が目に入った。そこには、後ろ姿の少女と、そして、ひとりの「女」が映っていた。

そのワンピースには、ウエストの後ろに大きな飾りのリボンがついていて、スカートの両側からそれがのぞいている。たしかに春花のような少女が好みそうな

デザインだった。

そして、鏡の中の「女」は、そのデザインにぴったりの初々しきでたたずんでいた。広い襟ぐりからのぞく首や肩も、細く柔らかな曲線を描いていた。眼鏡をしていないので顔はよく見えなかったが、姿形はどう見ても女だった。

雅樹はそれに驚き、呆然と鏡を見ていた。

と、突然、春花がなにかわけのわからない声を発し

た。それは、堪えていたものが一気にこみ上げてきたという感じの声だった。

驚いて雅樹が春花を見ると、春花は、肩をふるわせながら雅樹にしがみついてきたのだ。

春花は嗚咽していた。

もっと小さい子がイヤイヤをするように、顔を雅樹の「乳房」のある胸にこすりつけながら泣いていた。

その瞬間、雅樹にはすべてが理解できた気がした。

この子もまた、「母」を喪失した悲しい子なのだ。

雅樹は春花の肩をきつく抱きしめた。

その夜起こったことは、それだけだった。

春花は、雅樹の胸でひとしきり泣いたあと、恥ずかしそうに顔を上げて、「ごめんなさい」と言った。

こんな格好をさせてごめんなさいという意味だらう。

それは、雅樹がこの家に来てはじめて見た、春花の素直な表情だった。

「さつき、美里たちと寝ているところを見て、美里たちばかりずるいって思ったの。それで……」

「うん」

雅樹は「もうわかったから言わなくてもいい」という感じでうなずいた。

雅樹の顔を見上げた春花もうなずき返し、「おやす

みなさい」と言っけて部屋に帰っていったのだ。

ただそれだけだった。それだけだったが、雅樹はやつと春花と心が通い合えた気がし、うれしかった。

成りゆきそのものは、奇妙この上ないものだったが、これで春花も自分に心を開いてくれるようになるだろう。

雅樹は、そう思った。

ところが、ことはそう簡単ではなかったようだ。

翌朝、美里と舞に朝食を食べさせていると、春花はのっそりとダイニングに入ってきた。昨夜、あんなことがあったせいで寝坊したのだろう。

雅樹が「おはよう」と明るく声をかけると、春花は一瞬その顔を見つめたあと、またいつものように無関心そうに目をそらし、返事もせずにはテーブルについた。

もつとちがう態度を期待していた雅樹は、肩すかし

をくった気がした。

春花は、食事中も雅樹に対しては頑なに口をきこうとせず、視線をそらしたままだった。

いつものことなので、美里や舞は気にしていないようだったが、昨夜のことがあったあとだけに、雅樹にはそれが不満だった。

そのうえ、いつもなら俊介がいて食事の席は会話が弾むのだが、今朝はそれもなく、ぎごちない雰囲気

ただよっていた。

食事が終わると、春花は自分の部屋にさっさと引っ込んでしまった。なんだかその態度は、いつもよりさらに頑なに見えた。

夏休み中でもあり、基本的に仲のよい姉妹たちだったから、雅樹のことは無視していても、雅樹が家事で忙しい間、いつも春花が美里たちと遊んでやっていた。しかし、今日はそれすらする気がないようなのだ。

雅樹は、家事をかたづけながらずっと春花のことが気になっていた。

昨夜は、たしかに春花が心を開いてくれたように感じた。でも、あれは錯覚だったのだろうか。

洗濯や掃除をしている時も、昼食の準備をしている時も、そんなことばかり考えていた。

昼食の場でも、春花の態度は朝と同じだった。いや、朝よりさらに沈んだ暗い感じに見えた。

昨夜、あんなになりふりかまわず泣いていた春花のことを思うと、雅樹はその悲しみを抱え込んだ心を、もつと開いてやりたいと感じた。そして、なぜだかわからないが、それができるチャンスは今しかないように思えた。

そんなことを考えながら洗濯物を取り込み、たたんでいた三時頃、ふと気がつくくと先刻まで聞こえていた美里と舞の遊び声が聞こえなくなっていた。

心配になって二人が遊んでいたリビングまで見に行くと、なんと二人はソファの上で体を寄せ合うようにして寝入っていた。

春花は遊んでくれず、俊介もいない。そのうえ、雅樹はなにかしきりに考え事をしている。午前中から二人だけでつまらなそうにままごとなどをしていた舞と美里は、遊びにも飽きて寝てしまったのだろう。

だいいち、三歳の舞は毎日お昼寝をするのが習慣な

のだ。春花のことばかり考えていた雅樹は、そのことさえ忘れていた。

もしかしたら眠たくなつた舞を寝かせつけようとして、美里もつられて寝てしまったのかもしれない。

雅樹は舞たちにかわいそうな思いをさせてしまった
と思ひながら、二人にタオルケットをかけてやった。

（僕はけっきょく、この家の子どもたちの気持ちを本
当にはわかってあげていないのかもしいな……）

雅樹は、たたんだ洗濯物をしまいながらそう思った。そして、最後の洗濯物をしまいにいきながら、ふと、今日、春花があんなふうになっているのは、これまでとはちよつとちがう理由からなのかもしれないと感じた。

朝食の時は気がつかなかつたが、あの時、キッチンに入ってきた春花は、一瞬、雅樹の顔を見つめたような気がする。これまでなら、最初から雅樹とは視線を

合わさないのでふつうなのに、今朝は雅樹の顔を見つめ、そしてそのあと、なんだか落胆したような感じで視線を落としたのだ。

もしかしたら、春花は今朝、なにかを期待していたのではないか。その期待がはずれて、落胆しているのではないのか。

例の衣装部屋に入りながら、雅樹はそう思い至った。そして、手にしていた洗濯物を見つめた。

それは、雅樹がこここのところ連夜身に着けている――
――だから、そつと洗って干した――ブラジャーだった。

4 母娘の肖像

よく映画や漫画などで、眼鏡をかけた色気のない女の子が、それをとったとたん見違えるほど魅力的に変身するというパターンがある。

たとえば、「ロッキー」に出てくるエイドリアンなど、その典型だろう。

そういうものを見るたびに、雅樹は「そんなばかな」と思っていた。ましてや、自分がそれに当てはまるなどとは考えてみたこともなかったのだ。ところが……。近視がひどく、雅樹は中学時代から分厚いレンズの眼鏡をかけている。それも、フレームの太い黒ぶち眼鏡だ。

どうやら、この、顔の輪郭がゆがんでしまうほど度の強いレンズと、無骨としか言いようのないフレームが、雅樹の「際だった特徴」を隠していたらしい。雅樹がこれまで、人から「女みたいな顔だ」と言われずにすんでいたのも——だから当然、自分もそんなふうにしたことがなかったのも——、この眼鏡のおかげだったにちがいない。

現に今、眼鏡を取り、ワンピース姿で鏡の中にたた

ずむ「女」の顔は、どう見ても女にしか見えない。長髪と言ってもぼさぼさで、もちろん化粧気もない。なのに、そのフェミニンなデザインのローズピンクのワンピースに少しの違和感もないのだ。

けっきょくそれは、眼鏡の印象の陰に隠れていた、柔らかな感じの頬の輪郭や、黒目がちで二重の深い目が、表に現れた結果だろう。

澤入家の衣装部屋の姿見の前で、雅樹はそれにあぜ

んとし、そして一方で、この間、自分をめぐって起こった出来事に、なんだか納得がいく気もした。

考えてみれば、例のパッドとブラジャーを着けて美里と舞を寝かしつけている時も、昨夜、春花に言われるままにこのワンピースを着た時も——寝る態勢に入ってからのことだから——、雅樹は眼鏡をかけていなかったのだ。

近くで鏡を見なかったので自分ではよくわからな

ったが、そんな時、子どもたちはこの顔を見ていたわけだ。たしかにこれなら、子どもたちが「母親がわり」として抱きつくことに、さほどの抵抗も感じなかっただろう。

雅樹はしばらくの間、なんのためにこんな格好をしたのかさえ忘れ、自分の女装姿に見入っていた。

昨夜、おかしななりゆきだったとはいえ、澤入家の

長女、春花と初めて心が通じ合えた気がした。

ところが今日になってみると、ふたたび春花の態度は頑なになった。

もしかしたらそれは、自分が男の姿に戻ったせいなのではないかと考えた雅樹は、昨夜と同じ女装姿で春花と話してみようと思いたったのだ。

もちろんそれが、常識的な行為と言えないのは雅樹にもよくわかっている。こんな格好をすることの恥ず

かしさも当然ある。

しかし、昨夜、雅樹に女装させ、その胸で泣きじやくった春花の姿には、どこかただならぬものを感じた。

雅樹が思うに、それは、なにかを押さえ込んできたことの反動だ。おそらく春花は、子どもなら誰もが持っているはずの「甘えたい」という気持ちをも、母親が死んで以来自ら禁じてきたのだ。そんな感情が、昨夜、ああいうかたちで爆発したにちがいないかった。

もちろん、春花たちの父、澤入裕一郎は、子どもたちを心から愛し、率直に接するいわば模範的な父親である。そういう意味では、この子どもたちが愛情に飢えているわけではない。

しかし澤入には、わが子を一人前の人格として扱おうとするところが、だからこそ逆に、子どもたちにとっては無条件に甘えにくい雰囲気がある。

それが、この家の子どもたちを、どこか禁欲的にし

ているのだ。

特に思春期を前にした春花は、自分自身、「自立」と「甘え」の狭間で葛藤を抱え、それをわかってくれない父にわだかまりを抱いているのだろう。

また一方で、男一般に対して父のイメージを重ねて考える年頃でもある。それが、男である雅樹に対して心を閉ざし、ぶつきらぼうに振る舞う原因にもなっているのだ。

へたをすれば春花は、屈折した「暗い思春期」を迎えかねない。

雅樹にはそれが心配だった。

だからこそ今、その心をどんなことをしてでも開いてやる必要があるだと考えたのだ。

もちろん一方で、この間、夜ごとパッドとブラジャーを身に着けていることが、雅樹に女装に対する抵抗感を薄れさせていたのだし、そして今、鏡の中に少し

も不自然でない女装姿を見たことが、さらにそれを加速しているのだが。

衣装部屋を出て二階への階段を昇る時は、自然に内股で一步一步たしかめるような足どりになった。

ひとつには、リビングルームで「お昼寝」をしている美里と舞を足音で起こしたくなかったからだ。

そしてもうひとつには、眼鏡がなく、しかも膝丈の

スカートのでかいで足もとがよく見えなかったから……いや、そんなことより、膝や腿をなでるその感触が、ふだんの男っぽい歩き方をさせなかったただけなのかも知れない。

澤入邸の二階は、バルコニーに通じる大きなサンルームとピアノ室、それに、三室の子ども部屋——春花、俊介それぞれの個室と、美里と舞共用の部屋——という構成だ。

子どもたちと遊んだり、掃除したりする時、他の部屋にはよく出入りするのだが、雅樹はまだ、春花の部屋だけは入ったことがなかった。春花がそれを拒否していたからだ。

それもあり、雅樹はドアの前で躊躇ちゆうちよした。こんな馬鹿なこととはやめて戻ろうかとも思った。だが、せっかくここまでしたのだからと思い直し、おずおずとノックした。

「だれ：：、美里？」

中から春花の声が聞こえた。

雅樹は返事に戸惑った。こんな格好でなんと名乗るのが適当なのか、思いつかなかったのだ。

雅樹が黙っているのです、部屋の中で足音がし、春花がドアを開けた。

次の瞬間、雅樹を見て、春花が息をのむのがわかった。

「あの……、お話があるんだけど……、入っても、いい？」

雅樹の顔を見つめていた春花は、一瞬後、その言葉にゆっくりとうなずいてドアをさらに開いた。

見られていることに雅樹はひどく恥ずかしい気がしたが、春花の方もまた、ちよつと照れたような顔に変わった。その照れは、けっして雅樹の訪問をいやがっているふうではなかった。

部屋はきれいに整理され、小学生の少女らしいかわいい小物類が、出窓や本棚の上に並べられていた。

雅樹は立ったまま、まず、こんな格好をしてきたことの言い訳を口にした。

「なんだかこの方が、春花はちゃんとお話ししてくれるような気がして……」

「……うん」

春花は小さくうなずくと、「そこに」と、かわいい

花柄のカバーの掛かったベッドを指し示した。

雅樹はいったんそれに腰を下ろしかけてから、スカートに気づき、もう一度腰を浮かせ、裾をまとめながら座りなおした。さらに、前の裾もまくれ上がらないようにそろえた。そんなふうになると、自然に、膝を合わせ脚を斜めに傾けた座り方になった。

自分がそんな仕草をしていることにまた照れて、雅樹はさらに言い訳をつづけた。

「こんなカッコ、恥ずかしいんだけど……」

「そんなこと、ないと思うよ」

春花は雅樹と向かい合う形に学習機の椅子をまわし、腰掛けながら言った。

「おかしく、ないかしら？」

言ってから雅樹は、自分が、ふだんとちがう言葉づかいをしているのに気がついた。

「ぜんぜん変じゃないよ。すごくよく似合ってるもん」

「ほんと？　そんなら、うれしいけど」

会話の成りゆき上だったとはいえ、雅樹は、自分さらにおかしなことを口走っているのに戸惑った。

「私ね、今、サキさんがそんなふうにして来てくれたらしいなと思ってたの。だから、ちよつとびっくりしちゃった」

春花はその時初めて、他の子どもたちと同じように、雅樹のことを「サキさん」と呼んだ。

「サキさん、ほんとお姉さんみたい」

春花の顔には素直に喜びの表情が浮かんでいた。雅樹は、女装してやってくることを期待していたという春花の言葉に驚いたが、それ以上に、春花のうれしそうな声や表情に、自分自身うれしくなっていた。

そして、そんな雰囲気をごわしたくなくて、おかしな言葉づかいをしていることなど、気にしないことになりました。

「そう……ね。春花、ほんとは、お姉さんに来てほしかったんだものね」

いつか、春花が澤入にそう抗議したのを思い出し、雅樹は言った。

「……うん、……ごめんなさい」

「いいのよ。春花の気持ち、わからなくはないから」

「……？」

「春花は女の子だし、パパや男の人には言いにくいこ

とだつてあるもんね。それをわかつてほしくつて、ずつとあんなふうにしてたのよね」

春花は、雅樹の言葉に恥ずかしそうにうつむいた。

「でも、それだけじゃないわよね。春花は、パパにちよつと腹を立ててたんでしょ。パパはやさしいし、怒つたりしないけど、なんだか冷たい人のような気がして。死んだママのこと、まるで忘れちゃってるみたいだから」

雅樹が言うと、春花は驚いたように目を上げ、雅樹を見つめた。

「ママの話はぜんぜんしないし、春花たちがママのこと話すと、ちよつといやそうな顔をする。それに、ママの部屋には入っちゃいけないなんて言うし……。パパは、死んだママのことをなんにも思っただけでない。それじゃあ、ママがあんまりかわいそう。春花、そう思ってるんじゃない？」

春花はさらに驚いた表情で、雅樹の顔を見ていた。雅樹はそんな春花に微笑みながら、しばらく間をとったあと、話をつづけた。

「だけどね、考えてみて。ママが死んでいちばん悲しい思いをしたのは、本当は誰なのかな？ サキさんはパパだと思うんだけど、ちがうかしら。だって、パパは春花たちよりずっと長くママといっしょにいたのよ。ママとの思い出だって、ずっとたくさんあるにち

がないわ。悲しくないわけがないじゃない。きつと、泣きたくなることだってあると思うの。でも、もしパパがそんな気持ちに負けて、悲しそうな顔ばかりしてたらどうなる？ 春花ももちろんだけど、俊介や、それに美里や舞ちゃんなんて、毎日ママのことばかり思い出して悲しくてしょうがないんじゃないかしら。たぶんパパはね、春花たちにそんな思いをさせたくないから、あんなふうにママのことを忘れたような顔して

るんだと思うの。それって、ほんとはすごくつらいことなんじゃないのかな。それをわかってあげられないんだとしたら、その方がずっと冷たいんじゃないのかしら」

雅樹がそこまで話して言葉を切ると、春花はちよつとベそをかいたような顔をした。雅樹はその顔を見て、さらに春花の内心を探るようにつづけた。

「だけど、もつとほんとのことを言っちゃえば、春花

はたぶん、もうそのくらいのことにはわかってるのよね。だって、春花自身はずっとおんなじようにして、悲しいのをがまんしてきたんだものね。『長女の私がしっかりしなきゃ』って。そんなふうに、ママのことまるで忘れたような顔してる自分自身がいやで、それで、おんなじことをしてるパパを見ると、つい腹が立つちやう。：：ちがう？」

驚いたように雅樹を見ている春花の両方の瞳にみる

みる涙がたまり、そしてそれが、頬をつたって落ちた。

雅樹は、そんな春花の様子を、優しく微笑んで見守っていた。

やがて春花は、しゃくりあげるようにして、手の甲で頬の涙を拭った。

雅樹はベッドを立ち、春花のそばに歩み寄ると、その頭を抱き寄せた。

春花は昨夜と同じように、雅樹のワンピースの胸に

顔をすりつけるようにして、ひとしきり泣いた。

どのくらいそうしていただろうか。やっと泣きやんだ春花は、恥ずかしそうな、しかし屈折したところのまるでない顔で、雅樹を見上げた。

「サキさん……」

「ん？ なに？」

雅樹は、両手で春花の顔を挟むようにして涙を拭いてやり、そのまま、髪をなでた。

「どうして私のこと、そんなにわかつちやうのかな？
サキさんって、ほんとにママにみたい。私、今ずつ
と、ママとお話ししてるような気がしてた」

春花の表情はまったく無防備な、雅樹を信頼しきつ
たものだった。雅樹は、今度こそ本当に心が通じ合え
た気がした。

雅樹がそんな春花に黙って微笑み返していると、春
花はなにかを思いついたように、甘えた表情で言った。

「ねえ、サキさん。私の一生のお願い、きいてくれる？」

「……なあに？」

「髪の毛、といてほしいの」

「……え？」

「一生のお願い」などと言われ、春花がいったいなにを言い出すのかと思っていた雅樹は、その言葉にちよつと拍子抜けした。

「ママはよくしてくれたの。私、それが大好きだった」
「いいけど……」

雅樹が言うと、春花はさっそくうきうきした様子で椅子の場所を変え、机の脇の小さな鏡台の前にすわった。

春花が差し出したヘアブラシを受け取った雅樹は、その後ろに立った。

「……うれしい」

鏡越しに雅樹を見上げた春花は、本当にうれしそうに言った。

雅樹は、こんなことに春花がどうしてそれほどうれしがるのか、いまひとつ理解できないまま、背中までかかった春花の髪をブラッシングしはじめた。

「……うふ」

春花は、今度は声を出して笑った。

それは思わず出てしまったという感じの、喜びの表

現だった。

ちよつと腑に落ちない感じを抱いたまま、雅樹も鏡に向かつて笑いかけた。

鏡の中の春花は、輝くばかりのかわいらしさでうつとりと微笑んでいた。

髪をときながら、雅樹はそれにちよつと驚いた。

これまでも整った顔立ちだとは思っていたのだが、春花がこれほどの美少女だということに、はじめて気

がついた気がしたのだ。

それは単に、春花の側がこれまでこんな素直な笑顔を見せてくれなかったということだけなのかも知れないが、なんだかそれだけでないように感じた。

鏡には、そんな春花とともに、ワンピース姿の雅樹自身映っている。

美しい少女と、やさしいまなざしでその髪を櫛くしけずる女：：その姿は、なにか不思議にしつくりと鏡のフ

レームにおさまっていた。そして、そんなシチュエーションが、春花をさらに美少女に見せているように思えた。

そう感じると、雅樹自身にも、春花がそれをうれしがる気持ちがある、なんだかわかる気がしてきた。

「きれいね」

春花の髪の毛の毛に目を移して、雅樹は思わず言った。

自然な栗毛色のその髪は、つややかで柔らかい。

と、春花が言った。

「サキさんだつて、すごくきれいよ」

その言葉は、雅樹にとって、じゅうぶん不意打ちの効果があつた。

それは、春花の髪をとく自分の姿を見ながら——いや、正確には、先刻、衣装部屋で姿見を見た時から——雅樹がずっと感じていた心の高ぶりの本質を言い当てていたからだ。

だから、鏡越しに向けられた春花の視線に、雅樹はひどくどぎまぎし、頬を赤らめさえしたのだ。

「ちゃんとお化粧すれば、きつと、もつときれいになると思うけどな」

「……え？」

「……あ、そうか。今度は私がしてあげればいいんだ」

「……なに？」

「お化粧」

「……!?」

驚いている雅樹をよそに、春花は、その思いつきに興奮したように椅子を立った。

「私ね、ママがお化粧するところ見てるの大好きだったの。だから、きつとうまくできると思うわ」

その言葉どおり、春花は、メイクの手順をしつかり心得ているようだった。

雅樹を一階の衣装部屋まで連れていき、メイキヤツプテーブルに着かせると、なんら迷うことなくその作業を進めた。

その間、雅樹はされるままになっていた。先刻まで雅樹が会話をリードし、春花が泣いていたとは思えないほど、主客がすっかり転倒していた。

それは、春花の子どもらしい転換の早さではあったが、一方で雅樹の側がすっかり動転していたせいでも

あつた。

春花から「きれいだ」と言われ、それを喜んでいる自分に驚き、そのうえ、「お化粧してみよう」と提案され、どこかでそれを期待している自分を発見し、さらにどぎまぎしているうちに、ファンデーションを塗られ、アイメイクをされていた。

「ちよつと、唇を合わせてみて」

言われるまま、雅樹が両唇を合わせると、紅筆を持

った春花は、真剣なまなざしで下唇についたルージュを確かめ、そこを修正した。

「すごーい」

ちよつと体を反らすようにして雅樹の顔を見た春花は、自分のメイクの腕前にも、雅樹の顔の造作にもつかない、賞賛の声を上げた。

「まだ鏡見ちやダメだよ。髪も直すからね」

春花は雅樹に横を向かせていたから、雅樹はまだメ

イクされた自分の顔をすっかりと見てはいないのだ。

メイキャップテーブルの上に紅筆を置いた春花は、
今度はムースとドライヤーを取り出し、雅樹の髪のブ
ローにかかった。

「私、美容師さんになれそう」

器用にブラシを使っていた春花は、さも楽しそうに
鼻歌まじりで言った。

その頃になって、やっと少しは冷静さを取り戻した

雅樹は、なんだか春花に遊ばれているような気がしてきて、ちよつとむつとした。

しかし、次の瞬間、そんな感情は、どこかに消しとんだ。

「さあ、お客様、いかがですか？」

春花が、雅樹の座っている回転椅子を、鏡の方へくるりと向けたのだ。

「……えっ!？」

一瞬、呼吸が止まるかと思った。

鏡の中でも、美しい若い女が息を吞んでいた。

「……！」

「ね、言ったとおりでしょ。サキさん、すごい美人」

「……」

声すら発せられないまま、近視の雅樹は、鏡に顔を近づけ見入った。

ファンデーションのおかげで、もともと色白だった

雅樹の肌はさらになめらかでみずみずしいものになっていた。ブラウン系のシャドーは控えめだったが、それでも、やさしい感じの目鼻立ちをくつきりとしたものにしていった。ワンピースと色をそろえたローズピンクのルージュは、雅樹の顔に、これまでなかった可憐さをつけ加えていた。

(…：これが、僕？)

春花を気にして、声にこそ出さなかったが、その可

憐な唇がかすかにそう動いた。

「ねえねえ、こっちへ来てみて」

春花は鏡を見て呆然とする雅樹の手を取り、今度は、全身が映る姿見の前に導いた。そして、自分自身もその横に立ち、鏡の中に収まった。

それは、まるで一枚の絵だった。

一人の美しい女と、それに寄り添うように立つ美少女。

母と言うには女の方が若すぎる気はするが、美人の母娘のポーターレートと言っても、じゅうぶんに成り立つ絵だ。

そして、そう思っで見ると、二人の面立ちにはどこか似通ったところすらあるのだ。

「サキさん、この方がずーっといいよ」

それは「男の姿より」という意味だろうに、雅樹は思わずうなずいていた。

たしかに、若いのに風采が上がりないふだんの自分とは、まるで輝きがちがう人間がそこにいる気がした。その時、春花が言った。

「……あ、美里」

「……え!？」

見ると、鏡の端に開いたままの部屋のドアが映っていた。そこに小さな人影が立っているのが、目の悪い雅樹にもわかった。そしてさらに、もっと小さいもう

ひとつの影が加わった。

あわてて振り向くと、そのふたつの影は、なんだかびっくりしたように体を固めて立っていた。

美里と舞だった。

昼寝から覚めて、雅樹を探してやって来たのだ。そしてそこで、ワンピース姿の見知らぬ女が、姉といっしょにいるのを見た……。

「……ふふ、サキさんよ」

春花が、さもおかしそうに言った。

その言葉に、ふたりは呆然とこちらに歩いてきた。

近づき雅樹を見上げる二人は、まるで、まだ夢のつづきを見ているような顔をしていた。

幼い二人に見つめられ、逃げ出すわけにもいかず、雅樹はどきまぎと視線を泳がせた。

「サキさんね、今日は、私たちのママになってくれるんだって」

「……え？」

春花の言葉に、雅樹がそちらを見た瞬間、雅樹のスカートに「わーい」という声とともに美里と舞がとびついた。

その日、けつきよく雅樹は、夜までその姿のままだった。

雅樹が女になったことを素直に喜んでいるらしい美

里と舞に、また男に戻るとはどうしても言い出せなくなってしまうのだ。

子ども相手だとはいえ、三人の視線は恥ずかしく、また、奇妙な感覚だったが、雅樹は女装したまま子どもたちと遊び、夕食の準備をした。

炊事をしている間も、三人は雅樹から離れようとせず、うれしそうに手伝ってくれた。雅樹も、そんな格好で男っぽくするのもかえって変な気がして——それ

に、先刻春花と話していた時からの流れもあり――、やさしい仕草と女言葉で対していた。

事情を知らないものがそれを見たら、仲良く食事の支度をする若い母と感心な娘たちに見えたにちがいない。

夕食のかたづけを終え、雅樹はいつものように下の二人を入浴させた。

自分もいっしょに風呂に入り二人を洗ってやるのだ

が、この日はいつもとちがって、二人に自分の——男としての——裸体を見られているのが、妙に恥ずかしかった。

風呂から上がると、脱衣場に置いておいたパジャマが消え、代わりになんとシルクのネグリジェが置いてあった。

春花が、母のネグリジェを持ち出したにちがいなかった。

雅樹は迷ったが、他に着るものもなく——それに、幼い舞が着替えながら雅樹の体を不思議そうに見ているので——、急いで例のパッドとブラをつけ、そのネグリジェに腕を通した。

そのあと、いつもと同じように——ただし今日はネグリジェ姿で——、美里と舞に添い寝した。二人は、いつも以上に雅樹に甘えながら眠りに就いた。

二人がぐっすり寝たのを確かめ、リビングに出てく

ると、ソファに春花がいた。

「……んふ、それもよく似合ってるよ」

風呂上がりの髪をタオルドライしながら、春花はい
たずらっぽく言った。

「もお。あなたの仕業ね」

以前ならそんな子どもらしい素顔をけっして見せな
かった春花の変化にちよつとあきれて言ってから、雅
樹は、今度は自然に出た自分の言葉づかいにあきれた。

今日一日で女言葉がすっかり身につけてしまったようだ。

「パジャマ、どこへ隠したの？」

雅樹が春花の向かいに腰掛けながら、笑顔の中にもたしなめるような表情をつくって言うと、春花は急にちよつとまじめな顔つきになった。

「……ん？」

「ねえ、一生のお願い」

春花は、胸の前に手を合わせ、昼間と同じ言葉を口に
にした。

「今度はなあに？」

そのオーバーな素振りに、また子どももつぽい「お願い」にちがいないと思った雅樹は、軽い調子で聞いた。

「これからも、ずっとお姉さんのまままでいて」

「……えっ」

「明日も、あさってもママの服を着て。夏の間、せめ

て、パパが帰ってくるまでは。ね、お願い」

「……」

春花は、真剣なまなざしで言っていた。それだけに、どう返事をしたものか雅樹は困った。

それに、なぜか、その言葉に激しく動揺していた。

「……で、でも、あさってになれば、俊介だって帰ってくるし……」

ジュニアFCの夏合宿に行っている俊介のことを思

いだし、雅樹はやつと反論した。

「だいじよぶ。俊ちゃんには、私が言つて聞かせるから」

春花は、こともなげに言った。そしてこうつぶけた。

「だって、サキさん、そっちの方が似合うし、それに……、そんなにイヤじゃないんでしょ」

その言葉は、雅樹の気持ちの片面を鋭く言い当てていた。

5 スカートの風

子どもというものは、多かれ少なかれ、親を見て、それを手本として育つ。自分ではそんなつもりはなくとも、知らず知らずのうちにそうなってしまうものの

ようだ。大人になって、自分の行動や言動が親と似通っているのにふと気づき、愕然とするというような経験は、きっと誰にもあることだろう。

雅樹の場合は、要するにそれが、ちよつと特異な出方をしたと言っているのかもしれない。

雅樹は、母ひとり子ひとりの母子家庭で育った。三歳の時に両親が離婚し、その後、父には一度も会っていない。

だから、物心ついて以来、雅樹が手本とする親は母親しかいなかったわけだ。

雅樹が澤入家の家庭教師をつづけるうち、いつしか女装し、母親役を演ずることになってしまった根本的な理由は、けつきよくはそのあたりにあるのかもしれない。なかった。

もちろん言うまでもなく、母子家庭で育った男が、すべて女っぽくなるというものでもない。現に雅樹自

身も、これまで一人前の男としての社会生活を支障なく送ってきたのだし、そんな気配はいつさい表に現れていなかったのだ。

ところが、住み込みで四人の子どもたちの面倒を見ることになり、そのうえ、彼らの父親が長期の旅行で留守をし、さらに、家事を担当していた家政婦までが夫の入院で家を離れてしまった。雅樹が一人で、家事も育児もこなさなければならなくなったわけだ。

ひとつ屋根の下で子どもたちと「家庭生活」を送るという環境が、幼い頃の記憶を呼び覚まさせたとしても言えはいいだろうか。ただひとりの大人として、子どもたちにどう接していいか不安になった時、自然に「母」を手本にしていたというわけである。

もちろんそれだけではなく、他にも条件はそろって
いた。

澤入家の子どもたちは、まさにその、「母」を強く

求めていたのだし、雅樹自身は、華奢な体で、そのう
え、眼鏡をとると女のような——それも、きわめて美
形の——顔をしていた。

そんなことを考え合わせれば、雅樹にとって、こう
なってしまったのはいわば必然だった……というの
は、やはりちよつと言い過ぎだろうか。

しかし、もつとうがった見方をするなら、その奥に
は、さらに深い心理的必然性があつたのかもしれない。

雅樹がこんな暮らしを始めることを決定づけたのは、なにより鏡の中に自分の女装姿を見たことだったが、それは、単にその姿が美しかったからというだけではないだろう。

じつは、雅樹はそこに、文字どおり「母」を見ていたのだ。

鏡の中の雅樹は——親子なのだから当然といえは当然だが——、彼自身の母の若い頃にそっくりだったの

である。

雅樹の無意識は、なによりそれに感応した。

子どもの頃、自分を抱きしめてくれた若く美しい母
：：大人の男として成長する過程で、どうしても心の
奥深く閉じこめざるを得なかったその甘美な記憶が、
その時、雅樹には自分の肉体を通してよみがえった気
がしたのにちがいない。

母ひとり子ひとりだったからよけいに、無意識の中

に刻まれたその記憶は深く、だからこそ深層心理的な希求は強い。

本人の認識がどうあれ、雅樹はこの時まちがいなく彼自身の欲求として——澤入家の子どもたち以上に——「母」を再生しようとしていたのである。

そうとでも考えなければ、この時期、雅樹が日一日と自分から変わっていったことの説明がつかないだろう。

その変化がどんなものだったのか、八月中旬のある朝の雅樹の行動を通して見てみよう。

子どもたちの朝食の用意をしなければならぬから、いつも雅樹は早く起きるのだが、この日はいつもよりさらに早起きした。

二日前から気になっていた「あること」をかたづけたいと思ったからだ。

いっしょに寝ている美里と舞を起こさないように、雅樹はそつとベッドを出た。こんな時のネグリジェの裾の扱いもだんだん慣れてきた。

ベッドを降りた雅樹は、美里と舞にタオルケットを掛けなおし、そこに立ったまま、しばらく二人の寝顔を見ていた。

二人はあどけない顔でまだすやすやと寝入っている。そのかわいらしい表情を見ているだけで雅樹は心

が満たされる気がし、もつと見つづけていたという欲求にかられたが、早起きした理由を思い出し、あわてて部屋を出た。

バスルームに行き、脱衣場でネグリジェを脱ぐ。

下にはもちろん、例のブラとパッドを着けている。

じつはそれだけでなく、数日前から下穿きも変えていた。やはり美里たちの死んだ母の引き出しで見つけたショーツを穿いているのだ。ブラに男物のブリーフ

では、なんとも不格好な気がしてきたからだ。

着ているものをすべて脱いだあと、雅樹はまずシャワーを浴びた。自分の体だけでなく、シリコンラバーのパッドも洗う。最近では一日中着けているので――夏場ということもあり――、こうしないと汗臭くなってしまう。

そのあと、いったんバスルームを出た雅樹は、洗面台に置いておいたコンタクトレンズをつけた。

これも、ここ数日の大きな変化のひとつだった。もう例の黒ぶち眼鏡をかける気がせず、食料品の買い出しに出た時——外出はさすがに男姿で行くのだが——、コンタクトレンズ店に寄って作ってもらったのだ。コンタクトを入れると、雅樹はふたたびバスルームに戻り、ボディソープを泡立てて、首から下の全身に塗った。そしておもむろに、用意しておいたレデイシエーバーを手にとった。

その前にコンタクトをつけたのは、要するに、そうしないとおぶないと思ったからである。

——つまり、気になっていた「あること」というのは、体毛のことなのだ。

二日前、それが気になりだしたのは、ノースリーブのミニワンピースを着ようとしたからだだった。

その日は今年最高という暑い日で、涼しい服が着たいと考えた雅樹は、衣装部屋のクローゼットでそれを

見つけた。オフホワイトのコットン製のそのワンピースは、上半身は体の線に沿い、切り返しになった腰のあたりから、膝上十五センチのフレアスカートがふわりと広がるデザインだった。

着て鏡に映すと、それは、雅樹の小柄で細身の体によく合って、清楚でかつコケティッシュに見えた。しかし、そこには明らかな欠陥があったのだ。

雅樹はもともとけっして毛深い方ではないのだが、

すね毛はそれとわかる程度に生えているし、腋毛ももちろんある。布の少ないその服は、それらをあらわに
してしまっていた。

雅樹は、今自分が女装しているのは、子どもたち——
すくなくとも三人の女の子たち——がそれを望んで
いるから「しかたなく」だと思っていたし、それも、
彼らがさみしい思いをしているこの夏かぎりのことだ
と考えていた。だから、体毛まで処理してしまうのは

なんだか抵抗があった。それで、その日は、その服を着るのをやめにした。

ところが一度気になりだすと、他の服を着ていても、そのことが気になってしかたない。半袖ブラウスの袖口や膝下丈のスカートからときどきのぞく体毛が、やたら目につくようになった。

そして、昨夜ついに、どうにも我慢ならない気がしてきて、朝起きたらその作業をしようと決心したわけ

である。

腋から始めて、雅樹はほぼ全身の毛を剃った。

作業がすべて終わり、もう一度シャワーで体を流し

たあと、雅樹は鏡で全身を点検した。そして――

（これであのワンピースが着られるわ）

心の底で思った。

やはり、雅樹がこんなことをした理由は、理性で認

識しているのとはちよつとちがうところにあるようだ

った。

バスローブをはおって例の衣装部屋まで行った雅樹は、今度はメイクにかかった。

これも、大きな変化のひとつだ。

女装で生活するようになった最初の三日ほどは春花にメイクしてもらっていたのだが、四日目にはもう、雅樹は自分でそれをするようになっていた。そんなこ

とでいちいち小学生の手を借りるのもおかしい気がする、というのがその理由だった。

最初の頃は、厚化粧っぽくなりすぎたりしてなかなかうまくいかなかったが、女性雑誌の別冊などを買ってきて、そのマニュアルを見ながら練習した。

そこからもわかるように、雅樹はけっこうその作業に熱中し、時には朝食の準備を忘れていることすらあった。

その顔が驚くほど化粧映えするものだったのも、熱中の原因になっていた。

ファンデーションを塗り、シャドーを入れ、ルージュをさすと、その顔は、まるで別人のように輝きを増す。やさしく柔らかな全体の印象の中に、くつきりとした目鼻立ちを持った、本物の女性にもなかなかない美しい美人が現れるのだ。当然、その存在感は、男の時より圧倒的に強い。雅樹は、自分自身のそんな変身ぶり

に興奮していた。

そんなふうだったから、メイクの腕前もみるみる上達し、一週間後には春花がしてくれるのよりずっとうまくできるようになっていた。

男の時にはおしゃれなどまるで無頓着だった雅樹が、その日の服に合わせてシャドーの色を変えるなどという芸当さえするようになっていた。

この朝もまた、鏡の中には、ほぼ理想に近い女がで
きあがりつつあった。

雅樹は、最後にコーラル系のルージュを入れメイク
を仕上げると、おもむろに立ち上がり、バスローブを
脱いだ。

そして、例のワンピースを着てみる。

二日前とちがい、その服は一点のミスマッチもなく
似合っていた。

これならいつそポニーテールにでもしようかと髪をかき上げると、両腕の下に、白くきれいな腋が初々しくのぞいた。ミニスカートからは、じやまするものになくなった涼しげな脚が、すらりと伸びていた。

「んふ：：あの子たちのママにしては、ちよつと若すぎるかしら」

姿見の前ですこし首を傾けながら、雅樹は満足げにつぶやいた。

「うわあ、サキママ、その服かわいい」

キッチンでキウイの皮をむいていると、入ってきた春花が背後から声をかけてきた。

「おはよ」

振り向いた雅樹は、ちよつと照れながらも、明るく言葉を返した。

春花が言った「サキママ」というのは、最近、女の

子たちが始めた雅樹に対する呼び方だった。「サキさん」というのと同じで、今度の場合も、まず、末っ子の舞が「シヤキママ」と言い始め、それが他の子たちに広まったのだ。きっと舞は、昨年死んだ本当のママとは区別したいけれど、どうしても「ママ」と呼びたかったのだろう。

「パンにする？ それともフレーク？」

雅樹が聞くと、まだうれしそうに雅樹の方を見てい

た春花は、やっとテーブルに着きながら言った。

「玄米フレークにしとく。私も、そんな服が似合うようにシェープアップしなきゃね」

「あら、あたし、べつにダイエットなんてしてなくてよ」

雅樹は、棚からシリアル箱を取りながら答えた。

そのやりとりは、どう見ても若い母と娘のものだ。この間、女言葉で通している雅樹は、こんな会話も無理

なくできるようになっていた。

「春花はこれから体ができるんだから、ちゃんと食べなきゃだめよ」

雅樹は、器いっぱいにフレークを入れ、牛乳をたっぷりかけて春花の前に差し出した。

「おはよー」

おっとりした声とともに美里が入ってきた。そしてそのあとから、まだ眠そうに目をこすりながら舞がつ

づいた。

「……あつ、サキママ、かわいっ」

美里は、雅樹を見るなり、春花と同じ反応を示した。

女の子はやはり、こういうことには敏感だ。

美里の言葉にあわてて見上げた舞も、一瞬ぽかんとしたあと、「シェーラームーンみたい」と言った。彼女にしてみれば、最高のほめ言葉だろう。

「さ、いらっしやい」

雅樹が両手を差し出しすと、舞はすぐに抱きついてきて、雅樹の両頬にキスした。

「おはよ、シヤキママ」

これが、このところの舞の毎朝の儀式だった。

二人をテーブルにつかせ、パンとサラダを出したところ、今度はのっそりと俊介が現れた。

「あ、俊ちゃん、おはよ」

雅樹が声をかけると、俊介は雅樹の方をちらっと見

たあと、むずかしそうな顔で、無言のままテーブルに
ついた。

返事を期待していた雅樹ががっかりして春花の方を
見ると、春花はちよつと肩をすくめてみせた。

これが、目下のところの雅樹の最大の悩みのたねだ
った。

女装することで春花と打ち解けることができたと思

つたら、今度は、俊介が以前の春花のようになってしまったのだ。

俊介がそうなった理由は、雅樹にもわからなくはなかった。というより、むしろ当然だという気もした。

慕っていた家庭教師のお兄さんが、自分がジュニアFCの合宿から帰ると、突然「お姉さん」になっていたのだ。驚いたのはもちろんだが、なんだか裏切られた気さえしたのだろう。

「俊ちゃんには私が言っただけ聞いて聞かす」と言っていた春花の説得も功を奏さず、俊介は、雅樹といっさい口をきこうとしなくなってしまった。もちろん、以前のように「いっしょにサッカーをやろう」などとも言わない。

雅樹も話そうと試みるのだが、声をかけると、俊介は居心地悪そうに逃げていってしまふ。

雅樹の方もまた、それ以上、追いかけてでも話そうという気にはなれなかった。俊介に対して、自分が女

装していることの合理的な説明をする自信がなかったし、それに、女装姿と女言葉で俊介と話すのは、雅樹にとっても居心地のよいものではなかったのだ。

ただ、俊介の場合、その態度は春花の時と少しちがう気もした。

春花が雅樹を避けていた時は、自分の部屋にこもったりして、雅樹の前からなるべく身を隠すようにしていたのだが、俊介はそうでもない。日中もたいてい雅

樹の目の届く範囲にいる。雅樹と目を合わさないのは春花の時と同じだが、雅樹が俊介の方を見ると、あわてて目をそらす——つまり、それまでは雅樹のことを見ていた——というようなことが多かった。

俊介は春花にくらべてまだ子どもだから、ひとり孤立しているのがさみしいのだろうと雅樹は考えた。

その俊介のことを別にすれば、女装によって、雅樹

と澤入家の子どもたちとの間にはさらに深い精神的つながりができあがっていった。ただの家庭教師より「母親」の方が子どもたちとのきずなが強いのは、いわば当然だろう。

雅樹は毎日、女として振る舞い、家事をし、子どもたちと遊んだ。

炊事や洗濯や掃除は、なんだかこの方がうまくやれる気がした。

家事に大切なのは、なにより細やかな心づかいだろ
うが、男の格好の時、どこか粗雑になってしまったりこ
ろが、女の格好ですること、不思議と繊細な気づか
いができるようなのだ。

たとえば洗濯物を干す時、以前だったらTシャツな
ど、ただハンガーに掛けて適当に吊るしていただけだ
った。掛け方が少しぐらい曲がっていろいろが、洗濯物
どうしがくっついていようがあまり気にはならなかつ

た。その結果、取り込んだあと、しわになっていたり、かたくずれしたり、時には半乾きのものさえあったりした。

ところが女装でするようになってからは、自然に、洗濯物をきちんと伸ばし、よく風が通るように順番や間隔に気をつけて干すようになっていた。

なぜそうなったのかは雅樹にもうまく説明できなかつたが、あえて言えば、女として暮らしている方が「風

を感じる」からだという気がした。

洗濯物を干していると、庭をわたるちよつとしたそよ風も髪やスカート揺すつていく。自然とそれを体で感じとって、反応しているのだ。

それは、掃除や炊事にしてもそうだ。女の格好でいる方が、汚れや味に対して、なぜか敏感になる気がする。

もしかすると——その衣服の構造なども含め——、

女という存在は、まわりに対する感受性が強まるように仕組まれているのかも知れないと思えた。

しかし雅樹は、そんなふうに分がセンシティブになっっていることが、けっしていやではなかった。その方が、以前だったら「面倒くさい」と思うような家事も含め、毎日を楽しむことができる気がするのだ。

子どもたちとの遊び方も変わった。それは、要するに俊介と遊ばなくなったからだ。つまり、サッカーと

かプロレスごっこがなくなつたわけである。

そのぶん、美里や舞たちと、絵本を読んだりままごとをしたりして過ごすことが多くなつた。

そんな時、雅樹は、リビングの床や庭の芝生の上にフレアスカートを広げてすわり、ゆったりと落ちついた時を過ごした。それが、家事に追われる毎日のくつろぎの時間になつていた。

とはいえ、時には、庭を走りまわつて鬼ごっこやか

くれんぼをしたりすることもある。女の子と言っても、舞や美里はひとつところに長時間じっとしていられる年齢ではないのだ。

客観的に見れば、これは、そうとう異常な生活にちがいない。しかし、現実から切り離された澤入邸の中で、現実社会の基準をいまだ持たない子どもたちだけに囲まれ、雅樹は、それを異常だとは思わなくなつて

いたのだ。

しかし、そんな現実離れした暮らしから引き戻される時が、唐突にやってきた。

八月も下旬に入ったある日。

この日も雅樹は、舞たちと庭で鬼ごっこをしていた。

「さあ、つかまえるわよ」

芝生の上を黄色い声をあげながら走りまわる二人を、雅樹は花柄のスカートをひらひらとはためかせな

がら追いかけていた。

美里と舞は、最初、手をつないで逃げていたが、雅樹が間近に迫ったのに気づき、芝生の真ん中あたりで右と左にわかれた。

雅樹はちよつと迷ったが、門の近くの立木の方へ懸命に駆けて行く舞をつかまえることにした。

もちろん、舞はまだ三歳児。いくらいっしょうけんめい走ったところで、すぐに追いつくことはできる。

しかし雅樹は、彼女の楽しみを奪わないように、ゆっくりと追いかけた。

それでも、舞が立木のところで振り返った時には、すでに三メートルと離れない距離まで近づいていた。

舞はそれに驚いたようすで、「きやつ」と叫び、振り向いたまま、門からつづく敷石に走り出た。

「あ、あぶない」

雅樹は思わず叫んでいた。

その時、開いたままの門から、一台のタクシーが入ってきたのだ。

タクシーの方が先に舞に気づき、急ブレーキをかけた。

舞はむしろその音にびっくりして、敷石の上に転んだ。

さいわい、さほどスピードを出していなかったタクシーは、舞から二メートルほど離れた場所で止まった。

しかし雅樹は、舞が心配で、タクシーのことなど気にせず駆け寄っていた。

「だいじょうぶ？」

雅樹が抱き起こすと、舞はすりむいた膝を押さえてべそをかいた。でも、それ以上たいしたけがはないよ
うだ。

「あー、よかった」

ほっとして舞を抱きしめながら、雅樹はやっとタク

シーの方を振り向いた。

と、タクシーの後部ドアが開き、中からひとりの男があわてて降り立った。

舞たちの父、澤入だった。

その姿に雅樹は慄然りっぜんとし、舞を抱いたまま立ち上がった。

「舞、だいじよぶか？」

澤入もなにより舞のことが心配だったのだろう。小

走りに駆け寄ってきた。

「あっ、パパーっ」

雅樹に抱かれた舞は、転んだ痛みも忘れてうれしそうに言い、澤入に向かって両手を差し出した。

澤入はそんな舞を雅樹から受け取ると、抱きしめ、ほおずりした。

そしてそのあとではじめて、雅樹の顔を見た。

「ん？　：　：　君は？」

澤入は、ぽかんとした表情で言った。目の前の「女性」の正体に、まったく気づいていないのだ。

雅樹はどぎまぎし、目を泳がせた。

どうしたらいいのか、困惑していた。

まさか今日、澤入が帰ってくるとは思ってもいなかったからだ。

もちろん雅樹は、けっして澤入の存在を忘れていた

わけではない。

上海に滞在していた澤入からは、一日おきくらいに国際電話が入っていたし、そのたびに雅樹は、子どもたちの様子を仔細に報告していた——自分が今どんな格好で子どもたちの面倒を見ているのかは言っていないなかつたが——。

雅樹は、もし澤入が帰ってくるということになったら、その時点で「留守中のことはパパには秘密だよ」

と子どもたちに言い含め、女装をやめるつもりでいた。

もしかすると幼い舞や美里は秘密を守れないかも知れないが、そのへんは、そもそもこんなことの発案者で、今や完全に雅樹の味方になっている春花が、うまく取り繕ってくれるだろうと考えていた。どうやら、春花の方もそのつもりでいるらしかった。

しかし、「その時」はまだもう少し先だろう。雅樹はそう思っていた。

澤入からの電話では、いつ帰国するとかいう話はいっさい出ていなかったのだ。現に、昨夜あったばかりの電話でも、澤入は何も言っていなかった。おそらく澤入は、突然帰国して子どもたちを驚かすつもりだったのだろう。

いずれにしても、これは、雅樹にとってまったく予想外の出来事だった。

雅樹は硬直したようにその場を動けずにいた。そのくせ、地面に落とした視線だけはやけに落ちつきなく動いていた。

その視野の端では、キャミソールふうタンクトップの胸のふくらみが小刻みにふるえていた。露出した肩や腕の肌が、澤入の視線にひりひりと痛むような気がした。

澤入はまだ、突然わが家に現れた謎の女性について、

把握できずにいるようだった。相手がなにも言わないので、首をかしげて顔をのぞきこむようにしている。

と、そんな奇妙な雰囲気の中にいる二人を取り囲むように、他の人物たちが集まってきた。

別の方向に走っていた美里は、舞のことを心配して、すでに近くまできていた。

ブレーキの音を聞きつけたのだろう。春花がリビンの窓から顔をのぞかせ、そのあと、緊迫した状況に

気づいて飛び出してきた。

先刻からひとり芝生でサッカーボールを蹴っていた俊介も、足を止め、こちらを見つめている。

それだけでなく、タクシーからもうひとりの人物が降り立ち、やはり、不可解そうに視線をこちらに向けていた。澤入といっしよに中国に行っていた秘書の山村美奈子だった。

すべての人物が見守る中、そんな状態が一分近くつ

づいた。

と、澤入の腕に抱かれ、まわりのようすを不思議そうに見ていた舞が、青ざめた雅樹に気づき、心配気に聞いた。

「どうちたの、シヤキママ……？」

「……え!？」

舞の言葉に、澤入は短く叫んだ。

「もしかして……、君は？ ……！」

その言葉に、雅樹はうつむいていた顔を上げようとしたが、澤入のことを注視できず、上目遣いで見るような感じになってしまった。

「なんて……ことを……」

やっと目の前の人物の正体に気づいた澤入は、それが信じられないらしく、まとまった言葉が出ないようだった。

澤入は、呆然とした表情で雅樹の全身を上から下ま

で見た。

そして、その服に目をとめた。

「それは……、家内の……」

婦人衣料商社の社長である澤入は、その服が死んだ妻のものであることに、まず気がまわったのだらう。

そしてなにより、そのことに逆上した。澤入の顔が、あつと言う間にこれ以上ないほどの怒りの形相に変わった。

最愛の亡き妻の服を男が着ている。それは、澤入にとって許しがたいことだったにちがいない。

「……ば、馬鹿野郎！ それを脱いで、とつとと出て行けっ！」

澤入の声は、広い邸中のすみずみにまで響いた。

抱かれていた舞が「わーっ」と泣き出した。

6 子どもたちの反乱

「時間というものは、人類が発明したのだ」と言った哲学者がいる。

もともとの世には「今この瞬間」しか存在しない

のに、記憶などというものを持った人間が、思い通りにならなかった悔恨を「過去」と名づけ、反対側にそれが報われるはずの「未来」というものをでっち上げ、そこではじめて「時間」が生まれたというのだ。

それはまあ、かなり逆説的な形而上学だが、時間にはたしかにそんな主観的な側面があるのも事実だろう。

雅樹にとって、澤入家で過ごした一ヶ月余りの時間

は——本人は認めたくないとしても——、どうやら、それまでの二一年間以上の意味を持ってしまったようなのだ。

今、九州の実家に帰った雅樹は、それこそ自分が、時間の流れからドロップアウトしてしまったような感覚の中で日々を送っている。

先の哲学者の論を借りるなら、それは、悔いるべき「過去」を断ち切られ、その結果、報われるべき「未

来」もなくなってしまうたということになるのだろうか。

この一ヶ月間の女装で過ごした「過去」については、たしかに「なんて馬鹿なことをしてたんだ」という後悔がある。しかし、その後悔が報われるような「未来」など考えられないし、一方で、その後悔が大きければ大きいほど、なぜかそれより以前の二一年間の「過去」は色あせたものに感じられる。そこにつながる「未来」

は、なおさら魅力のないものに思えてくるのだった。

「なにぼんやりしてるの。じやまじやない。私はあんななんかとちがって忙しいんですからね」

居間にごろんと寝ころんでいた雅樹の背中を掃除機
の先でこづくようにして、母の芙紗恵ふさえは文句を言った。
すでに仕事に出掛けるために和服に着替え、その上か
らたすきを掛けて部屋の掃除をしているのだ。

「……ああ」

雅樹はのっそりと体を起こすと、縁側まで這っていつて、またぼんやりとサツシにもたれた。

「……突然帰ってきたと思ったら、なんだか知らないけど、ぼーっとしちやつて。あんた、ちよつとへんよ」
掃除機を忙しく動かしながら芙紗恵は言ったが、肝心の雅樹はすでにその言葉を聞いてはいない。

庭のまだ色づかない鶏頭けいとうをなんとはなしにながめな

がら、その思いはどうしても澤入家の子どもたちに向かう。

（……あの子どもたち、どうしてるかしら。舞ちゃん、あたしがいなくなっただ泣いてないかしら……）

知らず知らず女言葉で考えていた自分に気づき、雅樹は苦笑した。

そして同時に、あの日の澤入の怒りに満ちた形相を思い出した。

突然帰国した澤入が、女装姿で子どもたちと遊ぶ雅樹を目撃して激高したのは——それがいいとか悪いとかいう判断以前に——、雅樹が着ていたのが死んだ妻の服だったからだ。

ちよつと粗野そうに振る舞ってはいるが、ふだんの澤入はそんなに感情的な人間ではない。もちろん、女装男がわが子の面倒をみるというような事態を許容す

るわけではないにしても、本来なら雅樹の言い分も聞き、もつと理性的にことに対処しようとしただろう。

それが、いわば問答無用で——雅樹が荷物をまとめ
る暇すらなく——屋敷から追い立てたのは、その怒り
が生理的と言ってもいい嫌悪感に根ざしていたからに
ちがいない。

妻が亡くなってからすでに一年以上たつというの
に、その服を処分できないでいるほど、澤入は妻を愛

していたのだ。そして、まさにその、思いのこもった服を、別の男の体で汚された気がした。澤入は、なによりそれが我慢ならなかったのだ。

その怒りは、文字どおり、とりつく島がないという感じで、雅樹はそそくさと男の服に着替え、鞆ひとつだけを持って、逃げるように澤入家をあとにしたのだ。つた。

澤入邸を出た雅樹は、迷った末、けつきよく名古屋

駅に向かい、新幹線に乗った。前に住んでいたアパートはすでに取り壊されて影も形もなくなっているし、大学の友人たちも夏休みのためほとんど留守で、名古屋に身を寄せるあてもなかったのだ。

なんの前触れもなく突然帰郷した雅樹に、芙紗恵は驚いたようすだったか、「夏休み中、一度くらいは帰りたいと思ってさ」という雅樹の言葉に、それ以上、わけを聞こうとはしなかった。

芙紗恵というのは、そんな母なのだ。

鶏頭が、風に揺れている。

この家は——十年ほど前に買った時、すでに築二十年とか言っていたから——建屋は古いが、夏の風通しだけはいい。この日も相当に残暑厳しい日だというのは、縁側にすわっているだけでじゅうぶんに涼しかった。

肌をなでていく涼風に、雅樹は知らず知らずTシャツの胸に手をやった。

そのあたりが、なんだか妙に虚しい気がする。それはもちろん心が空虚だという意味だが、それより、もっと体感的なさみしさの方が強い。

そこには、ついこのあいだまで、シリコンラバーのパッドでつくった形のよいふたつのもりあがりがあったのだ。今、なにもない平らな胸は——それが本来の

姿であるというのに――、なにかひどく貧相なもののように思える。自分自身の大事な一部を失ってしまつたという気さえする。

柔らかなそのふくらみを舞や美里にまさぐられていく時の、豊かに満ち足りた気持ち……もうそれを取り戻すことはできない……それが、虚しさときさみしさの、なによりもの正体だった。

雅樹はそんな思いを振り切るように首を振り、なん

とはなしに家の中を見返した。

と、すでに掃除を終えた芙紗恵が、鏡台の前に座つて顔をつくっていた。

再来年で五十になる芙紗恵は——雅樹が子どもだった頃にくらべればたしかに衰えたとは言うもの——、まだじゆうぶんに若く、化粧映えもした。

福岡市内のカルチャーセンターなど三カ所に、自らの名を冠した茶道と着つけの教室を持っている芙紗恵

は、ときどき地元テレビ局の情報番組などからも出演依頼が舞い込む。品がよく、かつさっぱりしたキャラクターを買われてのことだが、もちろんその画面映りのよさも重要なポイントになっているのだろう。

芙紗恵自身もそれをよく心得ているところがあり、つねに、自分を美しく見せる努力をしているようだった。

もちろん以前だったらそんなことに関心を持つこと

もなかっただろうが、つい最近まで自らもそれをしていた雅樹は、化粧する芙紗恵の姿に見入った。顔を仕上げていくその手際によさに感心し、秘訣を探ろうとさえした。

「ん？　：：：どうかした？」

視線に気づいたらしく、口紅を塗っていた芙紗恵が、手をとめ、鏡越しに見返した。

「え？　あつ、：：：ううん」

突然声をかけられ、雅樹はあわてて返事をした。

と、芙紗恵はさらに驚いたように雅樹を見つめた。

雅樹の仕草がなんだか奇妙なものだったからだ。雅樹は小首を傾げて微笑し、肩をすくめるようにしていた。

直前に「胸」のことを考えていたせいか、それとも化粧を見ていたせいか、いずれにしても、女装で暮らしていたときの表情がもろに出た。

「……なに、それ？」

(……しまった)

それに気づき、雅樹はうろたえた。

不審気に見つめていた芙紗恵は、一瞬後、おかしそ
うに笑い出した。

「……あんだ、ちよつと人間変わったんじゃない？」

さっぱりとそう言って立ち上がった母を見上げ、雅
樹はとりあえずほつとした。

が、なにかフオローしなければならぬと思った。
なにか、母が気に入るようなことでも言つて……。

「かあさん……」

「なに？」

箆笥からセカンドバックを取り出した芙紗恵が振り
向いた。

「その着物、すごく素敵」

「……えっ？」

やぶ蛇だった。そんな言葉も、以前の雅樹だったらぜったい言わないはずのものだ。

「……あんた、やっぱりちよつとへん」

芙紗恵はまだ笑っていたが、その表情には、なにか気味の悪いものでも見るような眼差しが混じっていた。

「あ、だから、その……」

雅樹はさらに狼狽ろうばいした。

そんな雅樹を救ったのは、電話だった。座卓の上に置いてあったコードレスホンが、突然鳴り出したのだ。

「……はい、浜路でございます」

芙紗恵がそれを取り上げた。

雅樹がほっと胸をなで下ろしていると、電話の相手と言葉を交わしていた芙紗恵が、雅樹の方を見て言った。

「あんたによ。さわいり……さんって人」

「……えっ！」

雅樹は、驚きながら受話器を受け取った。

「……もしもし」

「あっ、君か」

なにかひどく焦っている感じのその声は、まぎれもなく澤入裕一朗だった。

澤入は、まるでせき込んででもいるような早口で、いきなり切り出した。

「春花から連絡は入ってないか？」

「……え？　春花から……ですか？」

「いや、つまり、四人のうちの誰からでも……」

「はあ……？」

話がよくつかめず、雅樹はあいまいに返事をした。

それでやっと気づいたように、澤入は事情を説明した。

「四人とも今朝から見あたらんのだ。今日は俺が早朝から出掛けなければならなくて、秘書の山村君に見て

もらってたんだが、彼女がちよつと目を離したすきに
いなくなってしまった。家の中も近所もくまなく探し
たが、どこにも見あたらん。それで、もしかしたら君
に連絡を取っているかもしれないと思つて」

「いや、こちらには……。でも、どうして？」

「そんなことは、俺にもわからん」

澤入は怒ったように言ったが、それは雅樹に対する
怒りというより、子どもたちのことが心配でならない

あせりからのようだった。

「とにかく、あいつらから連絡が入ったら、すぐに知らせてくれ」

澤入はそう言って、そそくさと電話を切った。

おそらくは、春花のクラスメイトの家などにも手当たり次第電話しているにちがいない。

「……どうしたの？」

まだ呆然としている雅樹に、芙紗恵が心配そうに聞

いた。

「え？ いや……」

と、その時また、雅樹の手の中で電話が鳴った。

雅樹はすかさず通話ボタンを押した。

「はい、浜路ですが」

「あ、サキさんいた。……よかった」

電話の声は、ほっとしたようにつぶやいた。

「……春花？ 今、どこにいる？」

焦って聞き返す雅樹に春花は言った。

「新幹線。岡山を過ぎたところ」

受話器の向こうからは、舞や俊介の声も聞こえていた。

雅樹は折り返し澤入に一報を入れたあと、今日は駅前の教室に行くという芙紗恵の車に便乗し、博多駅に急いだ。

車の中で事情を説明——もちろん女装の件は言わなかったが——すると、芙紗恵も心配し、いっしょに探してくれろと言いだした。

しかし、二人でホームを探しまわるまでもなく、子どもたちはすぐに見つかった。春花が新幹線の号数と車両を正確に伝えていてくれたからだ。

四人とも心細そうな表情はしていたものの、新幹線を降り雅樹を見つけると、元気いっぱいにとびついて

きた。

とりあえず澤入に無事子どもたちを保護したという連絡を入れ、もう一度電話する約束をしたあと、雅樹は、朝からなにも食べていないという子どもたちをレストランに連れていった。

まだ教室が始まるまでに時間があるという芙紗恵もいっしょについて来た——というより、芙紗恵が、雅樹も含め子どもたちにごちそうしてくれたいという方が

正しいのだが。

おいしそうに食事しながら、春花や俊介が話してくれたところによると、どうやらこれは計画的な家出だったらしい。

雅樹が澤入家を去ったあと、主には澤入が家のことをしていたが、会社の用事でそうもいかない時は、秘書の山村美奈子が家に来ていたらしい。ところが彼女は、子どもの扱いに慣れていなかったようだ。

「山村しゃん、舞ちゃんのこと、赤ちゃんみたいにし
ゆるのよ」

舞は不満そうに口をとがらせて、そう言った。

父といっしょにいるとき、四人が同時にいなくなる
のはむずかしいと考えた子どもたちは、美奈子が来る
ことになっていた今日を決行の日と決め、作戦を練っ
ていたという。

まだそのままになっている雅樹の荷物を放っておく

こともできず、澤入はそれを実家に送り返そうとしていたようだ。その書きかけの送り状から、雅樹の所在は見当をつけた。

事前に連絡すればとめられるに決まっているので、新幹線に乗ってから電話しようとして四人で決めたという。雅樹が実家に帰っているかどうかもはっきりしないのだから、子どもたちにしてみれば、大きな賭けだったろう。

名古屋から博多までの新幹線代は、お年玉などを貯めた四人の貯金を合わせればじゅうぶん足りた。でも、雅樹がいなかったときのこととも考え、道中なにも食わず、無駄遣いしなかったのだという。

「すっかりした子どもたちね」

話を聞きながら、芙紗恵は感心して言った。

「でも、どうしてこんな馬鹿なことをしたの？」

雅樹が聞くと、デザートをつついていた春花は、そ

の言葉が心外だとしてもいうようにすねた口調で答えた。

「サキさんに、会いたかったから……」

「……」

そう言われてしまえば、雅樹にも返す言葉はない。

と、芙紗恵がバッグから携帯電話を取り出し、春花の前に差し出した。

「ともかく、あなたからお父さまに電話なさい」

その毅然とした、しかし愛情のこもった言い方に、雅樹はあらためて母の強さとやさしさを感じた。

澤入に電話した春花は、まず「ごめんなさい」と素直に謝った。

そのあと、しばらく話し込んでいたが、突然声を大きくして言った。

「いや。サキさんといっしょじゃなきゃ帰らない」

またしばらく会話がつづいたが、澤入はけっきよく

それを承諾したようだった。

かしこい春花のことだ。おそらくここまでの成りゆきを計算して家出劇を演じたのだろう。電話の会話を聞きながら、雅樹はそう思った。

と、春花はつづけてこう言った。

「サキさんに、前とおんなじようにしてもらっていいのよね？」

たぶん、春花は春花なりに芙紗恵の存在に気を使っ

たのだろう。それ以上、明確な言い方で父に要求することはできなかつたようだ。

けつきよく、その日のうちに、雅樹が子どもたちを名古屋まで送りとどけることになった。

子どもたちがそこまで自分のことを慕っていてくれたことはうれしかったが、それはそれで、雅樹にとっては気の重いことだった。

いったい、どんな顔をして澤入と会えばいいのか。そのうえ春花たちは「前と同じように」雅樹といっしよに暮らせると思っている。

飛行機——往復の長旅では舞が疲れるだろうと、芙紗恵が手をまわし航空券をとってくれたのだ——の中で、子どもたちの冒険談を聞きながらも、雅樹はそんなことばかり考えていた。

夕方、名古屋空港に着くと、澤入が自らベントンを運
転して迎えに来ていた。

ロビーで顔を合わせた澤入は、雅樹に「ありがとう」
と言った。そして、「春花との約束だ。また、うちに
来てくれるか？」と聞いた。

その顔はけっして歓迎しているふうではなかった
が、雅樹は「はい」と答えた。子どもとの約束でもき
ちんと守ろうとする澤入の態度に、ことわるべきでな

いと感じたからだ。

ところが、話はそれだけでは終わらなかつた。

ベントツに乗り込むと、春花は、電話ではあいまいなままにしていた約束のもう半分を持ち出したのだ。

「パパ、サキさんにまたお姉さんになってもらってもいいのよね」

「えっ……」

助手席の雅樹と運転席の澤入が、ほぼ同時に声を上

げた。

「それは……」

二人はまた同時にそこまで言って、そして同じように絶句した。

「私も美里も舞も、そう思ってるの。ねっ？」

春花が同意を求めると、美里と舞は、元気よく「うん！」と返事した。

「そうじゃなきや、私たち、また家出しちゃうよ」

「……そんな、めっちゃなことを言うなよ」

ハンドルを握った澤入は、前を見つめたまま言った。

「どうして？」

春花の言葉に、澤入は大きくため息をついた。

「お前ね、だいいち、浜路先生の気持ちだってあるだろう」

「サキさん、いや？」

「いや、その……」

春花に聞かれ、雅樹はまた言葉につまった。春花を
がっかりさせたくなかったし、正直な話、自分でもど
う答えたいのかわからなかったのだ。

その煮えきらない態度が理解できないとでもいうよ
うに、いらだった感じで、澤入は今度は唯一の息子に
救いを求めた。

「それに俊介の気持ちだってある。なあ、俊介、どう
思うんだ？」

雅樹は、俊介の答えは明らかだと思った。俊介は、雅樹が女装してからというものの、口をきいてさえくれなくなっていたのだ。それを嫌っていることはまちがいになかった。

ところが俊介は、うつむいたまま、きまり悪そうにこう言ったのだ。

「僕も……、女のサキさんの方が……好き」

その時になってはじめて、雅樹は、俊介の態度が、

この年頃の男の子独特の「照れ」だったことに気がつ
いた。

俊介もまた「母」を求めていた。だから、女の子た
ちと同様に雅樹が女になったことを喜んでいたので。

しかし、それを悟られるのが恥ずかしくて、あんなふ
うにしていたのだらう。

澤入もまた、俊介の答えが意外だったのだらう。苦
々しい表情で、ちっと舌打ちをした。

そして、まるで負け惜しみでも言うようにこう宣言した。

「俺は、許さんぞ」

屋敷に着いてからも、澤入は苦り切った表情をしていた。

ところが春花たち女の子は、案の定、雅樹に「ママの服着て」と言ってきた。

澤入がああ言った以上、雅樹はそれを無視するしかなかった。

もつとも、屋敷の中が散らかっていて、そんなことにとりあっている暇がなかったのも事実だった。雅樹はその夜遅くまで、たまった掃除や洗濯をかたづけなければならなかったのだ。

夜になり、子どもたちが寝ついてから——長旅で疲れたのだらう。舞や美里もその夜は添い寝なしで眠り

についた——、雅樹は澤入の書齋を訪ねた。

ドアの外から来たのを告げ、入ると、澤入は雅樹に背を向けて椅子に座っていた。

「あの……、僕のせいで家の中をいろいろ混乱させてしまつて、申し訳ありません」

雅樹がそう言うと、澤入は背を向けたまま短く「まったくだ」と言った。

雅樹は、澤入の次の言葉を待ったが、澤入はそれ以

上なにも言おうとしなかった。その後ろ姿は、雅樹に腹を立てているようにも見えたし、なにかを考えているようにも見えた。

「……失礼します」

しかたなく、雅樹はそう言って部屋を出た。

翌日になって澤入が出社したあと、また春花たちが女装してくれるように「お願い」に来た。驚いたのは、

前日のように女の子たちだけでなく、俊介までが恥ずかしそうについてきたことだった。

それでも雅樹は、子どもたちに首を縦に振らなかつた。

午後になり、つまらなそうに遊んでいる子どもたちを横目で見ながら、洗濯物を取り込んでいるときだった。

運送会社のトラックが屋敷に入ってきて来るのが見え

た。

何だろうと見ていると、トラックは玄関に横付けされ、降り立った運転手がいくつもの段ボール箱を家の中に運び込み始めた。

雅樹が近づいていくと、運転手が送り状を差し出した。

「サインお願いします」

その書類には荷物の数が「12個口」と書かれている。

「何かのまちがいじゃないですか？」

雅樹がきくと、運転手がぶつきらぼうに「宛名はここだろ」と言った。

たしかに住所はまちがいない。差出人欄を見ると、衣料品メーカーのロゴが入っていた。

首を傾げながらサインして返すと、運転手は、そそくさとトラックに乗り込んだ。

トラックを見送ったあと、雅樹はどうしたものか迷

った。玄関に高く積み上げられた段ボール箱をそのままにしてもおけないだろう。

しかたなく、そのうちのひとつを降ろして、ふたを開けてみた。

中身は女物の衣類だった。おそらくは澤入の会社の商品なのだろう。

これは、メーカーかなにかが会社と社長宅をまちがって配送したにちがいない。そう考えた雅樹は、澤入

の会社に電話を入れた。

「荷物がたくさん家にとどいているんですが……」

社長室を呼び出してそう告げると、澤入は「ああ」
とだけ返事をした。

それ以上、澤入がなにも言わないので、雅樹はさら
にきいた。

「あの、もう一度運送会社を呼んで、そっちへ転送さ
せましようか？」

「いいんだ。俺が送らせたんだから」

「……え？」

「宛名をよく見てみる」

あわてて手に持った送り状の控えを見ると、住所の下に小さく「澤入方 浜路雅樹様」とあった。

「あの……、どういうことでしょう？」

雅樹がきくと、澤入はこう言った。

「俺は、君が家内の服を着ることだけはどうしても許

「せんのだ」

「はあ……？」

「サイズは家内のと同じにしといた。アイテムはもう少し若向きのものを選んである」

「……あの、つまり……」

「子どもたちにまた家出されちゃあかなわんからな」

「……え？」

「強制はせん。しかし、君がもしその気なら、それを

自由に使っていていいということだ。君のものなんだからな。頼むから、もうこれ以上、こんなばかばかしいことを言わせんでくれ。切るぞ」

電話が切れたあとも、雅樹はしばらく呆然としていた。

澤入の言ったことがまだよくのみこめないまま、リビングから玄関に出てくると、いつの間にか家に入ったのだろう、三人の女の子たちがわいわい言いながら、

雅樹が開けた段ボール箱をのぞき込んでいた。

「わあ、これ、きれい」

中の一枚を引っぱり出して吊るし持ったところで、

春花は雅樹に気づいた。

「……あ」

春花はひどく恥ずかしそうな顔をした。この家の子たちは、他人宛の荷物を勝手に見ていいなどとは、しつけられていないのだ。

「……ごめんなさい」

春花は肩をすくめ、その服をちやんとたたんで、箱に戻した。

雅樹はまだ呆然としながらも、その様子をほほえましい気持ちで見つめていた。たしかに、この子たちとだったら、これからも楽しく暮らしていけそうだ。

「でも……これ、どうしたの？」

やはりまだ子どもである。好奇心の方が自制心に勝

つたらしく、春花はきいた。

「……うん。春花たちのパパがね、サキさんにつて」
「……え？」

春花は一瞬ぽかんとしたあと、その表情を一変させ、うれしそうに叫んだ。

「やうい！」

けつきよく、春花が仕組んだ夏休み最後の家出劇は、

すべてがその思惑どおりに運んだようだった。

しかし、ここから先の展開までは、さすがの春花も予想していなかったにちがいない。話は、これ以降、いくらかしこくとも小学生には理解できない領域に入っていくことになるのだから。

7 星空の誘惑

人の個性というのは先天的に決まっているのか、それとも後天的なものか。それは、心理学や教育学の分野では、常に繰り返し議論されている大問題だ。

たしかに、怒りっぽいとか楽天的とかいう情緒的な部分は、持って生まれたものが大きい気がする。一方で、対人関係の持ち方などは、やはり置かれた環境に左右されるのだろう。いずれにしても、どちらか一方だけでパーソナリティができあがるわけではないし、どちらがより大きな影響を及ぼすかも、人によってさまざまなようだ。

女装し、今や女としての毎日を送っている浜路雅樹

の場合は、果たしてどちらの要因が大きいのだろうか。

雅樹本人に説明させれば、それは環境のせいだということになる。

なにより「母」を求めていた澤入家の子どもたちに望まれ、こんなことになってしまったのだ。自分という人間にもともとこういう性向があったわけではないし、ましてやそこにホモセクシヤルな動機などあり得ない：：つまり雅樹は、自分はけっして生まれつきの

変態ではないと思いたいわけである。

しかし——それを「変態」と呼ぶかどうかはさておき——、雅樹が本来持っている資質の中にそうした要素がなかったかといえ、多分に疑わしい。

現に雅樹は、女装という行為にわくわくするものを感じているのだし、あれほど無頓着だったおしやれに、女になったとたん積極的にもなっている。

それはどう考えても、純粹に雅樹自身のエロスのあ

り方から発していることだろう。そういうことのすべてを環境のせいにしてしまうのは、いくらなんでも虫がよすぎるというものだ。

そして、その伝でいけば、「ホモセクシヤルな要素はない」という認識もまた、疑っていいのかもしれない。かかった。

澤入家に戻って一ヶ月近くがたった秋分の日の朝、

雅樹はまだみんなが寝ているうちに起き出した。

まず風呂場でシャワーを浴び、シャンプーした雅樹は、バスローブのまま（自分の部屋の）鏡台の前に座った。

じつは今、雅樹の部屋には鏡台や化粧品などが揃っている。以前のように澤入の亡くなった妻の部屋を使うのは、澤入が喜ばないだろうと考え、バイト代を稼ぎ込んで自ら買い揃えたものだ。

早起したいちばんの理由は、前髪を切ろうと思っ
たからだった。

以前から長髪だったから、女装してもそんなに不自
然ではなかったのだが——その長髪というのは要する
に伸ばしっぱなしというだけのこと——、フロント
の部分は真ん中から左右にわけるようにするしかなか
った。

もともとやさしい顔立ちの上に、メイクすると雅樹

はかわいらしい感じになる。そんな顔に、その髪型は似合わない気がした。やはり、前髪をおろす方がいい。

本来なら美容院へ行くべきなのだろうが、いまだ買
い物など男姿で行っている雅樹には、とても美容師に
そんな注文をする勇氣はなかった。それで、自分で切
ろうと思ったというわけだ。

美里と舞——彼女たちは相変わらず雅樹の部屋で寝
ている——が目覚めないか気にしながらドライヤーを

かけ、その後、前髪を薄めにおろし、目の上あたりでカットした。

やはり予想どおり、その顔は、前よりもつとキュートに見えた。

雅樹はそんな雰囲気に合わせて、ナチュラルなメイクをすることにした。

明るいオークル系のファンデーション。同系色のシヤドー。ルージュとマニキュアは自然な感じのピンク

：
：
：
。

メイクができあがると、雅樹はバスローブを脱ぎ、
下着をつけた。

九月下旬とはいえまだ暑い日が続く。ブラとショーツだけにして、スリッパやキヤミソールはやめておこう：：：。

下着姿を鏡に映してシルエットを確かめたあと、雅樹はクローゼットを開けて、服を選ぶ。

クローゼットの中には、十数着のワンピース、数着のスーツをはじめ、ブラウスやスカートなど女物の服がずらりと並んでいる。中には、秋物でまだ袖を通していない服も何着かある。

この大量の婦人服はすべて——先刻の下着類も含め——、澤入が雅樹宛に送り届けさせたものだ。

澤入がなぜそんなことをしたのか、じつは雅樹にもよく理解できなかつた。

どう考えても、雅樹が女装することを、澤入が歓迎しているとは思えない。

お手伝いの昌さんはまだ夫に付き添って病院で暮らしていたから、雅樹は子どもたちの世話だけでなく家事もしている。だから、食事の時など、まったく言葉を交わさないというわけにはいかないのだが——そしてそんなとき、雅樹はなるべく女言葉を使わないように気をつけているのだが——、「パンにしますか、ご

飯にしますか？」という雅樹の質問に、澤入はいかにも不快そうに「めし！」などと答えるのだ。

けつきよく澤入は、なにより子どもたちに嫌われたくないのだろう。雅樹を連れ戻すために彼らが家出まですたことが、よほどこたえたにちがいない。

その子どもたちが、雅樹が女装することを強く望んでいる。また家出でもされてはかなわないと考えた澤入は、しぶしぶ雅樹に女装を許した。

しかし澤入は、亡妻の服だけはぜったいに着てほしくないのだ。それで、雅樹に女物の服を贈った。

そう考えるのが、最も妥当だろう。

しかし、それにしても……。

いくら婦人衣料商社の社長だとはいえ——社員が三百人以上もいるちゃんとした企業なのだから——、これだけの数の商品を一存で動かすわけにはいかないはずだ。おそらくは、なにかの理由をつけて自ら買い取

ったにちがいない。澤入がそこまでした理由が、どうしても解せなかった。

しかもその服が、不思議なことに、どれを着てみてもよく似合った。

だから逆に、毎日、クローゼットの前でどれを着ようか迷うことになる。

この朝も、雅樹は服を選ぶのに十分以上もかかってしまった。

あれこれ体にあててみた末、けつきよく、フェミニンなグレーのサマーセーターと白い綿のフレアスカートというおとなしめの取り合わせを選んだ。

雅樹が、前髪を切り、ナチュラルなメイクをし、地味めの服を選んだのには、じつはわけがあった。

今日はできるだけ女っぽく見せる必要がある。しかし、だからと言って、いかにもおしやれしましたという目立つ顔やファッションにはしたくない。

なにしろ今日は、初めて女装で外出することになったのだから。

「サキママ、その前髪よく似合うよ」

ベンツのリアシートで、隣に座った春花が言った。

「シャキママ、かわいい」

雅樹の膝にちやつかりと座った舞も、そう言って雅樹の顔を見上げた。

春花の横の美里も、助手席の俊介も、うれしそうに雅樹の方を見ている。

ただひとり澤入だけが、ぶすつとした顔で車を走らせていた。

澤入が「今度の連休、久しぶりに家族旅行に行こう」と言い出したのは一週間ほど前だ。「夏休み中は、俺がいなくてさみしい思いをさせたからな」というのが、その理由だった。

当然澤入は、自分と子どもたちだけの「家族」旅行だと考えていたのだろう。ところが、春花をはじめ子どもたちは、「サキママも行くんでしょ」と当たり前のようにきいた。それで澤入は、しぶしぶうなずいたというわけだ。

そのうえ春花たちは、雅樹に女装していくようにねだった。雅樹がそれをためらっていると、「だって、家族旅行なのよ」と春花は言った。子どもたちは、あ

くまで雅樹に母親役をやらせたいようだった。

車の中で、子どもたちは、すでにうきうきとはしやぎまくっている。

いくら裕福な家だとはいえ、この三年あまり、澤入家は、母の病気と死という暗い影におおわれていた。

こんなふうに家族全員でどこかへ出かけること自体、本当に久しぶりなのだろう。子どもたちが浮き立つのも無理はない。

そんな子どもたちにくらべ、大人二人は、どう見ても滅入っていた。

澤入にしてみれば、この場に雅樹がいることが——しかも、子どもたちがその雅樹にばかり話しかけるのが——気に入らないのだろう。

雅樹の方はもちろん、女装で人前に出ることが気が重いのだ。

だから、先刻立ち寄った四日市近くのサービスエリ

アでも、舞のおしつこの世話を春花に頼み、ずっと車の中にこもっていた。祭日で多くの人たむろするサービスエリアの、しかも婦人用トイレに入るなど、もつてのほかだった。

しかし、もうすぐそうも言っていられなくなる。車はすでに伊勢自動車道を抜け、パールロードに入っていた。

「ママーっ、あれに乗ろうよ」

俊介が、「幻のイベリア超特急」と名づけられたジエットコースターの方に走りだそうとしている。

「ちよっと待ってったら」

雅樹は、人混みの中で舞の手を離さないように必死だ。フラメンコが流れる抜けるような青空の下、雅樹は俊介と舞に両方の手を引っ張られながら、きよろきよろと視線を走らせる。アイスクリームを買いに行つ

ている春花と美里のことも気にかかるのだ。

「あ、ダメよ、これ。身長が一二〇センチ以上ないと乗れないんだって。舞ちゃん、無理だもん」

それでも文句を言っている俊介をやつとなだめると、今度は舞が「ママ、なにか飲みたい」などと言いつ出す。

「待ってなさい。今、お姉ちゃんたちがアイスクリーム買ってくるから」

と、やっと六人分のアイスクリームを抱えた春花と美里が戻ってきた。

「あれ、パパは？」

春花の言葉に、雅樹はやっと澤入の存在を思い出し、周囲を見まわした。

澤入は、少し離れたところで、そんな雅樹と子どもたちの様子を見ていた。

（なんだ、いるんなら、少しは手伝ってくれればいい

のに。

雅樹は、先刻までの気の重さをすっかり忘れ、ため息をつきながら、ベンチに腰掛けた。

旅行の最初の目的地である「志摩ス^{パルケ}・ペイン^{エスパニーヤ}村」に着いて車から一步外に出た瞬間から、雅樹の心配とためらいは、どこかに吹き飛んでしまった。いや、けっして女装で人前に出ることには安心したわけではない。それより大きな心配ごとが、矢継ぎ早に襲ってきたから

だ。

ちよつと目を離すと、子どもたちはどこかに消えてしまふ。しかも、小五、小三、幼稚園児、三歳児という四人の子どもたちだ。動く早さも興味を持つものもちがう。人があふれるパーク内で、ひとりも見のがさないように気を配っているだけで、大変なことなのだ。とても、自分が人にどう見られているかなど、気遣っている余裕はない。

「あ、そっち行っちゃダメよ」

「ちゃんと並んでなさい」

雅樹は、いつしか人目もはばからず子どもたちを追いかけて——もちろん自らはアトラクションを楽しむゆとりもなく——、大声で叫んでいた。

「ねえ、ママ、もうすぐパレードが始まるんだって。これ食べたらいこうね」

だから、子どもたちがいつしか、自分のことを「サ

キママ」でなく、ただ「ママ」と呼んでいることに気づいたのは、アイスクリームを食べながら、一息ついた時だった。

スペイン村で夕方過ぎまで遊び、鳥羽のホテルに着した時には、すでに八時近くになっていた。

じつは、このホテルのフロントで、澤入とフロント係の間に一悶着あった。ホテルが用意していた部屋が、

予約とちがったのだ。

澤入は三人用のスイートルーム二部屋を頼んでいたのに、ホテル側が確保していたのは、エクセレントスイート一部屋だった。ホテルとしては、上得意が家族旅行で来るのだからとわざわざ気を使い、一家全員が泊まれる、このホテルで最も大きく立派な部屋を開けて待っていたらしい。

「申し訳ございません。奥様やお子さまとごいっしょ

の方がよろしいかと思ひまして。あいにく連休で満室
でして、どうにも変更できません」

澤入はやはり、女装の雅樹と同じ部屋に泊まること
に抵抗があるのだろうか。さんざん渋っていたが、けっ
きよく、雅樹の方をちらつと見た後、チェックインカ
ードにサインした。

案内されて部屋に入り、澤入は少し安心したようだ
った。高級リゾートホテルのエクセレントスイートル

しく、部屋は広々とし、しかも、寝室と、ベッドを追加したりリビングの間がスプリングドアで仕切られ、実際にはふた部屋として使えるようになっていたのだ。

寝室もリビングも東向きに大きく開き、そのどちらからも志摩の海が一望できるバルコニーに出られる。

といつても、雅樹にはやはり、その眺望を楽しむゆとりなどなかった。

ホテルのレストランで全員で夕食をすませた後、ふ

たたび部屋に戻ると、まず美里と舞にバスを使わせ、その後、春花と俊介にも早く入るように言い、幼い二人を寝かせつける。ところが、二人はなかなか寝つかない。

苦勞しているところへ、風呂から上がった春花や俊介も加わり、あれこれ話しかけてくる。それで、舞たちはなおさら眠らない。

子どもたちは、何年かぶりの家族旅行にすっかり興

奮しているのだ。

けつきよく、上の子たちも含め、子どもたち全員が寝ついたのは、十時半を回った頃だった。

そのあと、雅樹はシャワーを浴びた。先刻、舞たちを洗ってやるため、いっしょに入っているのだが、その時は、自分の体を洗う余裕などなかったのだ。

心地よいシャワーの湯に、雅樹は、やっと人心地がつけた。

ところが、その後、バスルームの鏡の前で、雅樹は狼狽することになった。

ホテルには寝間着がないだろうと、ふだん使っているネグリジェを持ってきてはいたが、それを着るのはなんだかひどく恥ずかしい気がしてきたのだ。

リビングでは澤入がまだ起きている。ひとことも言葉を交わさずに寝室に隠れてしまおうのは、ちよつとおかしい気がする。かといって、ピンクのネグリジェ姿

で澤入の前に出ていくのは、もつとおかしなものだ。

それで雅樹は、とりあえず備えつけのバスローブを着て寝室に戻り、やはり持ってきていた淡いベージュの綿のワンピースに着替えた。

ジーパンとTシャツでもあればいいのだが、パンツをはくと他人から男だと見破られてしまいそうな気がして、そういうものを荷物からはずしていた。

子どもたちの掛け布団をなおしたあと、リビングに

出ていこうとして、雅樹はもう一度鏡に向かい、口紅を塗った。まったくの素顔で澤入の前に出ていくことも、なぜか恥ずかしいような気がしたのだ。

リビングで、澤入はソファに座ってウイスキーを飲んでいた。

こちらの部屋にある二つのベッドの片方では、すでに俊介が寝息を立てている。だから部屋の中は暗く、澤入の脇のルームスタンドだけが灯っていた。

「……やあ」

雅樹に気づき、澤入は、傍らのスツールを指し示すようにして言った。

スカートの裾を気にしながら雅樹がスツールに腰掛けると、澤入がきいた。

「君も、飲むか」

「はい、すこしだけ」

雅樹の返事に、澤入は、もうひとつのグラスにウイ

スキーを注いだ。

「今日は、大変だったな」

氷を入れながら、澤入が言った。

「あいつら、あんなにはしやぎまわるとはな。いつまでもちびすけのつもりでいたが、それぞれに、勝手に動きまわれるほど大きくなってんだな。正直な話、君がいてくれなかったら、どうなってたか。俺ひとりじゃ、とても面倒は見きれん」

水割りをつくり終わると、澤入はそれを雅樹に手渡した。

「お疲れさま」

「……すみません」

雅樹は、恐縮しながらグラスを受け取った。澤入の思わぬ言葉がうれしくもあった。

「それにしても……」

雅樹がグラスに口をつけると、澤入がまた、口を開

いた。

「そうしてると、君はほんとうに女にしか見えんな」
澤入が自分に視線を向けていることに、雅樹はひどくどぎまぎした。

「そう……ですか……」

どう相づちを打つのもおかしな気がし、曖昧な返事をした。

「今日だって、あいつらが『ママ』って呼ぶたびに、

まわりの人が不思議そうに君を振り返るんだ」

「えっ、じゃあ……」

雅樹は、ちよつと不安な顔をして聞き返した。

「あ、いや、そういうことじゃなく、やつらの母親にしては、君が若くてきれいすぎるからだ」

「そんな……」

雅樹はうつむき、頬を赤らめていた。澤入の視線がいよいよ恥ずかしかった。

「でも、俺のプロとしての目の確かさも、ちよつとはほめてもらわんとな」

「……？」

「君が今、毎日着ている服を一枚一枚見立てたのは、俺なんだぜ」

「……えっ」

澤入の言葉に、雅樹は思わず目を上げ、見返していた。

「そんなに驚かなくたっていいだろう。前にも、そんな話はしたはずだ」

たしかに、澤入からの荷物が届いた時、会社に電話した雅樹に対して、澤入はそんなことを言っていた。

「俺が、君が女装することを許したのは、子どもたちが要求したからだけだと思ってるのか」

「どういふ：：ことでしょう？」

澤入の真意がさらにつかめなくなつて、雅樹は聞き

返した。

「まったくばかげた話だが、君が死んだ女房の服を着ているのを見たとき、俺は一方で腹を立てながら、もう一方で君のことを観察していた。アパレル企業の経営者としての目が、ひどく刺激されたと言ってもいい。妻の服もたしかに似合ってはいたが、君には、もっと似合う服があるはずだと思った。君は、俺の会社の服をぜひ着せたいと思う、めったにいない素材だったん

だ」

澤入はそこで、手にしたグラスをちよつと揺すつた。氷がグラスに当たり、澄んだ音がした。

「男だということを知っていながら、そんなことを思うなんて、まったくどうにかしてる。君の女装姿が目には焼きついて、君を追い払った後も、俺の選んだ服をいつか君に着せたいなんて馬鹿なことをつい考えてしまふ。だから、君が帰ってきて、春花があんなことを

言い出したとき、俺はほんとうに動揺したんだ。ずいぶん迷ったが、どうしても俺のプロとしての目を確かめたくなってな……」

澤入はウイスキーを見つめながら、どこか恥ずかしげに言った。

雅樹は顔を伏せたまま、上目遣いにそんな澤入を見た。なんだか、胸がどきどきしていた。

と、澤入がまた顔を上げて、雅樹を見つめた。

「まったく、君はなんて男だ。そんなシンプルなワンピースでさえ、どこの若い女にも負けないほど魅力的に見せてしまっただからな」

澤入は、まるでため息をつくように、そう言った。

澤入の視線に耐えきれず、雅樹はさらにうつむき、それでも胸の動悸が収まらず、今度は視線を窓の外に向けた。

バルコニーの向こうに、夜の海が満天の星を映して

きらきらと光っていた。

「きれい……」

雅樹はバルコニーに出てみたくなってスツールを立った。澤入の前から逃げ出したいからでもあった。

外に出ると、月のない空に、銀河までがくつきりに見える星の世界が広がった。その光を受けた海には、いくつもの小さな島影が幻想的に揺れていた。

雅樹は手すりのところまで行き、身をもたせかけて

星空を見上げた。

あれがペガサス。あれがカシオペア。あのいちばん光っている真っ赤な星は、たぶん、……さそり座のアンタレス。

その時だった。

雅樹はすぐそばに人の気配を感じた。振り向くまもなく、雅樹の肩は、大きな力で抱きしめられていた。

「あっ」

首をひねって見上げると、頭ひとつぶん高い位置から、澤入が見下ろしていた。その視線は、雅樹の瞳をまっすぐに見つめてくる。

あわてて視線をはずそうとした瞬間、肩を抱く力がさらに強まり、澤入の唇が雅樹のそれに押し当てられていた。

一瞬なのかもしれないし、もしかすると十分だったのかもしれない。文字どおり息詰まるような時間が流

れた。

澤入の頭越しに見える星空が、雅樹を、まるで宇宙空間に浮かんでいるような気分にしていった。

やがて、そんな非現実のような時間が過ぎ、体を拘束していた力がすつとゆるんで、澤入の顔が離れていった。

雅樹は驚いた表情のまま、まだ澤入を見上げていた。澤入も雅樹のことを見つめていたが、一瞬後、大き

くため息をつくと、まるでなにか憑き物が落ちたように、目を泳がせた。

「……すまん。ちよつと……飲み過ぎたのかもしれない」
澤入は、そう言いわけすると、気まずそうに部屋に戻った。

雅樹は、その後ろ姿を呆然と眺めた。

その夜、雅樹は一睡もできなかつた。

自分の身に起こったことを考えつづけ、まんじりともせずにはベッドの中で一夜を明かした。と言つても、物事をまともに考えられたわけではない。頭は冴え渡っているのに、順序立てて整理できない。そんな感じだった。

またどこかで、「怖い」という気持ちも雅樹を眠れなくさせていた。

スプリングドアを挟んだリビングルームでは澤入が

寝ている。もしかしたら、そのドアをはね開け、今にも澤入が来るのではないか。それが怖かった。

そしてそれはたぶん——雅樹自身は気づいていないが——、そのドアを通って、自分が澤入のベッドまで行ってしまおうのではないかという怖さでもあった。

ところが、眠れなかったのは雅樹だけではなかったようだ。

翌日、澤入一家は、伊勢志摩で昼過ぎまで遊び、鳥羽からフェリーに乗って伊勢湾を渡り、知多半島を通って名古屋に戻ったのだが、車を運転している間、澤入はさえない顔であくびばかりしていた。フェリーの
中では、ずっと居眠りしていた。

そんなふうには、大人二人は疲れ切り、子どもたちは元気いっぱい帰宅した一家を待っていたのは、とんでもない知らせだった。

澤入の運転手で、お手伝いの昌さんの夫だった斉藤欣次が、入院していた病院で亡くなったというのだ。

心筋梗塞の手術後、欣二の入院は三ヶ月目に入っていた。いったんは持ち直し、退院のめどが立ったと聞いていただけに、澤入にとっても、また雅樹にとっても、寝耳に水の出来事だった。

斉藤夫妻には他に身寄りがないため、澤入は、二人の自宅でもある澤入家で葬式を出すことにした。翌日

に通夜、そして翌々日に葬儀という予定が立てられ、祭壇や供花が運び込まれた。

棺といっしょに帰ってきた昌さんは、肩を落とし憔悴した様子だったが、それでも、宗派を聞く葬儀屋や、通知すべき人のリストを作る澤入の秘書の山村美奈子に対し、てきぱきとはつきりとした口調で対応していた。

しかし、昌さんがけっして正常な精神状態ではない

ことに、少なくとも澤入と雅樹だけは気づいていた。

澤入家に戻った時、昌さんは、女装姿ではじめて対面した雅樹に向かってこう言ったのだ。

「あ、奥様。帰ってらしてたんですね」

葬儀の準備がされている間、そして、通夜の間も、雅樹は舞や美里がじゃまにならないように、ずっと二階の子供部屋で遊んでやっていた。

葬儀の日も、そうするつもりでいた。春花や俊介は列席しなければならぬだろうが、多くの人々が来ることでもあり、自分と小さい子たちは裏に隠れていた方がいいだろうと判断したのだ。

ところが澤入は、美里や舞も、そしてその後見役として雅樹も列席するように言った。

「でも、喪服もありませんし……」

雅樹がためらいながら言うと、澤入は、何の迷いも

なくこう言った。

「着物なら、女房のがあつたはずだぜ」

その言葉に雅樹があ然としていると、そばで聞いていた山村美奈子が言った。

「私が、着つけを手伝いましょうか」

あれほど雅樹が亡妻の服を着るのを嫌っていた澤入が、いとも簡単にあんなふうに言ったことが、雅樹に

は意外でもあったし、そして、なぜかうれしいような気もした。だから、例の衣装部屋で喪服や襦袢、足袋などを探している間、なんだか気持ちりが浮き立つような感じがしていた。

そんなふうには、取り出したものをテーブルの上に並べていると、衣装袋をほどいていた美奈子が、言った。「なんだか、楽しそうね」

雅樹は、その言葉に我に返り、今度はひどく羞恥し

た。今日は欣次の葬儀であって、ピクニックに行くわけではないのだ。

美奈子はべつに雅樹を非難する口調で言うてはいない。しかし、雅樹は恥ずかしさでいっぱいになり、美奈子の顔をまともには見られなかった。

それに、冷静に考えてみれば、美奈子のような若い女性の前でこんな格好をしていること自体、とんでもなく恥ずかしいことだった。

美奈子はすでに雅樹の正体を知っている。澤入とともに中国から帰った時、女装姿を目撃されているのだから、ごまかしようもないわけだ。

澤入も、信頼している美奈子には、雅樹がまた澤入家に戻って女装での生活を始めたいきさつを話しているのだろう。この葬式のごたごたの間、また美奈子と顔を合わせる事になったのだが、そんな時、澤入も平然としていたし、美奈子の方も特になんの感情も示

さなかつたので、雅樹もなんとなくそんなものかなと思っていた。

でも、よく考えてみれば、これは、とてもまともとは言い難いシチュエーションだった。

雅樹がそう考えながら目を上げると、美奈子は喪服を取り出しながら言った。

「でも、しかたないわね。あなた、女の私が見てもすごくきれいなもの。この喪服だって、きつと似合うと

思うわ」

「しかた、ない……？」

雅樹は、美奈子のその表現に、もっと深い意味が込められているような気がして、聞き返した。

「ううん、いいの。人のことをあれこれ言えるほど、私は立派じゃないから」

やはり美奈子は、もっとべつのが言いたいらしい。

「どういう……ことですか？」

「さあ、早く着てしまいましたよ。もう参列者の受付が始まるわ」

「言ってください」

雅樹が強い口調で言うと、美奈子は、ちよつと首を振ってから、渋々という感じで口を開いた。

「私はこれまで、社長がどんな突飛なことをしても異を唱えたことなんてなかったし、それに、偏見は持つ

てないつもりよ。だから、今、あなたがどんな格好を
していても、それを批判するつもりはないの。それに、
さつきも言ったように、あなたほどこいなら嫌悪感
だってないもの。でもね、あなたの行動が、結果とし
て他の人を不幸にするんじゃないかって、ちよつと心
配」

「他の人を、不幸に……」

「子どもたちのこと」

「えっ？」

「あなた、あの子たちが大人になった時のこと、考えたことあって？」

「……」

「子供にとって、親って、性格や人生観を形成する上でいちばん大事な存在でしょ。男の人を母親がわりとして育った子供たちが、どんな大人になるか。たとえば男女観とか、そういうことがゆがまないって保証は

ないと思うのよ」

口調は穏やかだったが、美奈子は、明らかに雅樹を非難していた。でも、雅樹に、それに反論する言葉はない。

「たぶんあなたは、あの子たちを心から愛してる。だから、そんなふうになった。それに嘘はないと思うわ。でも、愛情が深いからこそ問題が起こるってこと、けっこうあると思うの。それに、あなたは社長のことも

愛してしまった」

「……えっ」

「社長だって、あなたのことを愛し始めているわ。あなたの深い愛が、だんだんみんなを狂わせているんじゃないのかしら。私には、それが心配なの」

自分が澤入を愛しているなんて、そんなバカな……。雅樹は、そう思った。そして、こうも思った。

たぶん、美奈子の方こそ、澤入を愛しているのだ。

そのことを巧みに隠してものを言うのはフェアじゃない。
い。

しかし、子どもたちのことで、美奈子の言ったことはまちがってはいない。

やはり自分は、この家にはいけないのだ。

雅樹は、そう決心していた。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまでを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はずぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

ママズ・リーズン

Mom's Reason

<公開版>

CopyRight 1996 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500